ACRYLART

アクリラート別冊2019

The Scholar 20 Perspective

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊２０１９

holbein

ごあいさつ

若き美術家を支援し、美術界の発展に寄与することを願ってはじめられたホルベイン・スカラシップは、今年で34年目を迎えました。歴代奨学生の数は今年度第33回の認定者を含めると延べ1,200名にも達します。最初期にあたる80年代の奨学生は今や美術界を牽引するベテランたちであり、続くそれぞれの世代も、時代ごとのアートシーンの担い手として活躍してきた作家たちです。新しく認定される奨学生は、未来を託されるアーティストとして今後大いに期待されるものです。

本スカラシップは第30回から、色材だけでなく筆やキャンバスといったさまざまな画材商品の提供も開始し、絵画材料の総合ブランドとしてよりトータルなサポートができるようになりました。思いきった制作のために普段使っている絵具を大量に確保する人、新たな表現研究のために使ったことのない色や知らなかった画材を積極的に試してみる人、各作家の要求はさまざまです。いずれにしても豊富にある材料は作家の表現の幅を拡げてくれるものであったでしょう。

このたび第32回ホルベイン・スカラシップが修了致しました。20名の奨学者は、2017年に認定された作家です。本誌はその紹介と記録を目的に発行するものですが、スカラシップ認定後の作品のほか、認定前の作品もプロフィールページに掲載しております。スカラシップが作家達にどのような作用をもたらすのか、過去、現在の作品をこの冊子でご覧いただき、更には今後の活躍も見届けていただければ幸いです。

ホルベインは目の覚めるような美しい色をつくること、堅牢で安定した色を作ること、安全で使いやすいものを供給すること、そして何より作家の制作意欲を刺激するものを提供することを目指しております。

昭和から平成そして令和へと時代がうつりかわっても、ホルベインは変わらず作家に寄り添い、共に歩み続けます。

2019年7月

ホルベイン画材株式会社
スカラシップ実行委員会

The Scholar Perspective 20

Contents

第32回奨学者（五十音順）

伊藤知宏 ITO Chihiro 12 · 34

稲垣美侑 INAGAKI Miyuki 13 · 37

岩本麻由 IWAMOTO Mayu 14 · 40

小形有希 OGATA Aki 15 · 43

小野仁美 ONO Hitomi 16 · 46

香月恵介 KATSUKI Keisuke 17 · 49

香月美菜 KATSUKI Mina 18 · 52

国本泰英 KUNIMOTO Yasuhide 19 · 55

好地匠 KOHCHI Takumi 20 · 58

小牟田悠介 KOMUTA Yusuke 21 · 61

城愛音 JO Aine 22・64

新直子 SHIN Naoko 23・67

寺脇さやか TERAWAKI Sayaka 24・70

ハタユキコ HATA Yukiko 25・73

日淺優 HIASA Masaru 26・76

久松知子 HISAMATSU Tomoko 27・79

福田絵理 FUKUDA Eri 28・82

福本健一郎 FUKUMOTO Kenichiro 29・85

森島里香 MORIS HIMA Satoka 30・88

廖震平 LIAO Zenping 31・91

The Scholar Perspective 20

Works

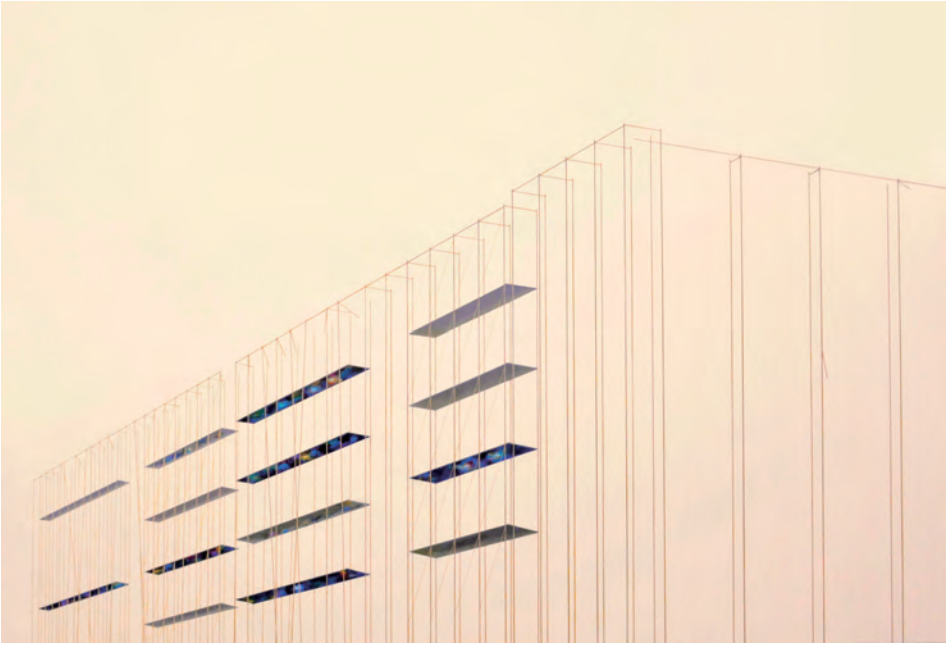
第32回奨学者の作品

伊藤知宏

Ueki -そこにあるものをえがく-
ペンキ、アクリル絵具、キャンバス
220.0×145.0㎝
2018年

稲垣美侑

(Installation View)
油絵具、キャンバス、布、ガラス、枝
サイズ可変
2019年
photo by 尾崎芳弘



岩本麻由

Untitled
油彩、キャンバス
130.3×194.0㎝
2018年−2019年

小形有希

ゆれる
油絵具、白亜地、キャンバス
24.2×33.3㎝
2019年

小野仁美

透き色を待つ

アクリル絵具、ポリエステル布、ジェッソ、木製パネル

192.4×138.4㎝

2018年

香月恵介

Le Pont sur le basin aux nymphéas,Giverny 1900
アクリル絵具、パネル
90.0×100.0㎝
2018年

香月美菜

0:29:29

アクリル絵具、ジェッソ、麻布、木製パネル

140.0×70.0㎝

2018年

国本泰英

Sight
アクリル絵具、キャンバス
50.0×120.0㎝
2019年

好地匠

十日後の湧き水

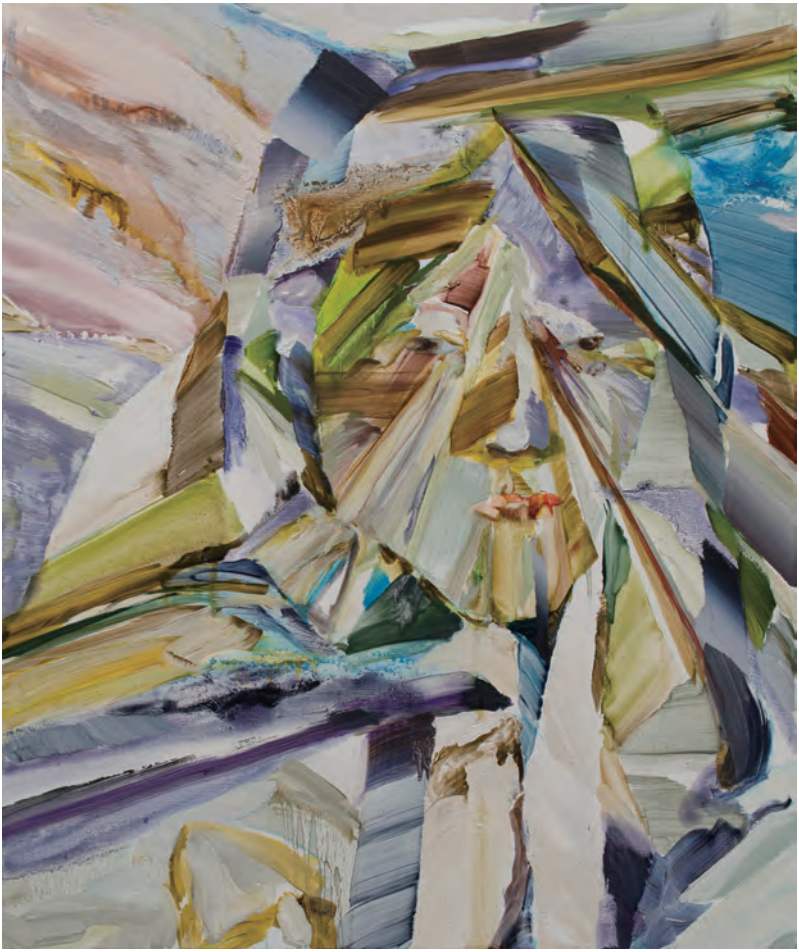
和紙、アクリル、パステル、色鉛筆、キャンバス

194.0×130.3㎝

2018年

小牟田悠介

HBT#2
アクリリックインク、綿布
106.0×86.0㎝
2019年



城愛音

Portrait H

油彩、キャンバス

73.0×61.0㎝

2018年

新直子

cold grace
アクリル絵具、キャンバス
130.3×162.0㎝
2018年

寺脇さやか

ミルトスの林
油絵具、キャンバス
100.0×65.2㎝
2019年

ハタユキコ

ニュ〜山形ユ
油彩、キャンバス
194.0×390.9㎝
2018年

日淺優

Island' s Rhythm

パステル、アクリル絵具、和紙、パネル

80.0×80.0㎝

2018年

久松知子

物語との距離(2018、夏、倉敷)
アクリル絵具、キャンバス
259.0×486.0㎝
2018年
画像提供：大原美術館

福田絵理

箱庭、２つの窓
油絵具、キャンバス
130.0×162.0㎝
2018年
photo by 加藤健　画像提供：Tokyo Arts and Space

福本健一郎

あめつちのかけら#38
アクリル絵具、流木、セラミック、鉄
50.7×17.8×11.0㎝
2018年

森島里香

Let me show you
アクリル絵具、キャンバス、パネル
45.5×38.0㎝
2019年

廖震平

Scenery “A”
油絵具、キャンバス
72.7×60.6㎝
2018年

The Scholar Perspective 20

Report

第32回奨学者のレポート

伊藤知宏

ITO Chihiro

伊藤知宏アーティスト ステイトメント

私は美術史の逸脱した場所からの挑戦的なアプローチや日常の中から出発する非日常な視点を持った問題意識を、いくつかある同時進行中のプロジェクトにおいて、ドキュメンタリー性や即興・即席性を制作の手段として今日的なアートをベースとして活動しています。そのパワフルで直感的な社会に対してノイズを吐き出して行くと見る側から評される作風は、精力的に行われるリサーチや、プロセス、コンセプトの中で連鎖する出来事の延長に位置づけられます。それと同時に「私」、「今」、「ここ」というそれぞれのできごとや私自身のアイデンティティについてのある種一貫した、人間性・社会性への問いかけの詩的な実践でもあります。また、私の行う幾つかのプロジェクトは一件取り留めのない様でいて、まるでファミリーツリー（家系図）の様なつながりをみせます。

僕の描く巨大な絵は、例えると野外で行われる音楽フェスティバルで鳴っている大音量の音の様です。そこでおこなわれているのは、ただミュージシャン達が歌を歌ったり、楽器を奏でているだけです。それはマイクやアンプなどの電気回路を通して、音を増幅させることによって、観客に届く頃には大音量の音になります。音は大きいだけで印象がまったく変わってしまいます。音を絵に例えたらどうなるだろうか？全く同じではないですが、似たような関係性が、音と絵画の間にはあると思います。

また、私の描く線は彫刻家の描く線のようだと言われます。これは僕の線が、描かれる時に、その形態の面の向こう側とこちら側を描こうとして描く事から繋がっています。それらは、彫刻家である両親から自然に身についたものであると思われます。平面性における形態への可能性を追求しています。

人間は、宇宙に比べ、チリ以上に小さな存在で、その中で一人で悩み苦しみ人を愛し傷つけ物を作りまた壊します。そんな人間が描いた大きな絵画はとても宇宙からみるとちっぽけですが、宇宙と同等かそれ以上の創造する可能性につながっていると、僕は信じたい。

本スカラシップを通して

僕の作品はモノクロの絵画を描くプロジェクト作品を13年ほど続けていましたが、少し行き詰まりを感じていました。

展示会は次々とおこなっていましたが、次第にどこかのタイミングで作品の変化を起こしたいと思うようになっていました。

今回のスカラシップでさまざまな色の絵具や筆をいただいたのですが、これらは同時に自分の作品に変化をおこすチャンスを得たことと同じことでした。

さまざまな絵具を手にすることにより精神的にも金銭的にもある種の余裕が生まれ、さまざまな色や筆を使用した実験を行う事ができました。

それにより、絵を描く上でさまざまな学びがうまれ、それらは思考性を含んだ重層的なものであったり、さらに要素を減らすことで重層的にしたりするもので、5月に東京・阿佐ヶ谷のアートフェスティバルで行った個展ではそれらを少しずつ表出する事ができました。

また、その後もいろいろな作品制作の実験を続けていましたが、スカラシップの助成の後半から文化庁の新進芸術家研修生としてニューヨークに行く事になったので、スカラ

Ueki -そこにあるものをえがく-
ペンキ、アクリル絵具、キャンバス
中央のもの2点は　31.8×41.0㎝
2018年

シップで助成いただいた残りの絵具のほとんどは日本の実家にある状況ですが、帰国後にまた新たな試みや制作ができると思うととても楽しみです。

この機会をいただいてとても感謝しています。
ありがとうございます。

Soundscape
ペンキ、アクリル絵具、壁紙
300.0×1000.0㎝×4枚
2004年

伊藤知宏

1980年　愛知県生まれ

2004年　武蔵野美術大学 造形学部油絵学科 卒業

個展
2019年　Centro para os Assuntos da Arte e Arquitectura　CAAA(招待)／ギマランエス［ポルトガル］（ '12 - '19まで毎年）
2018年　阿佐ヶ谷アートストリート　Art Space Kohsho／東京（ '14 - '18年まで毎年）
2017年　Buffer Zone／ニコシア［キプロス共和国］
Gallery Valeur／名古屋
代田橋　納戸 Gallery DEN5／東京
2016年　SPC Gallery／東京
2012年　Guimaraes noc noc in Guimaraes 2012(欧州文化首都招待)／ギマランエス［ポルトガル］
O3One Gallery(NPO 日本・ユーゴアートプロジェクト招待)／ベオグラード［セルビア］
2011年　Group IGS／パリ［フランス］
2010年　新世代への視点2010　藍画廊／東京
2008年　西瓜糖／東京

グループ展
2018年　matt+chihiro+steve with Steve Dalachinsky, Matt Mottel　muchmore's／ニューヨーク［アメリカ］
Degital Session with Art Jones3000, Matt Mottel, Kamimura Yoichi, Mukinko　Sonic Art Studio
ニューヨーク市立大学／ニューヨーク［アメリカ］
2017年　Buffer Fringe Festival 4　Bedestan／ニコシア［キプロス共和国］
2014年　阿佐ヶ谷アートストリート　新東京会館／東京
2011年　ZONE-秘境-　Tan shi Art Space／上海［中華人民共和国］
2010年　Contemporary Art From Japan　Luna Gallery／ストックホルム［スエーデン］
新世代への視点2010　ギャラリーなつか／東京
2008年　アフォータブル・アートフェア　Shion Art／ニューヨーク［アメリカ］

受賞歴他
2018年　文化庁新進芸術家海外研修制度研修員（ '18 - '19）
2017年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2015年　Bio Art Seoul 2015（２作品入選）　大韓民国国立果川科学館／ソウル［大韓民国］
2008年　Asian Annual Awardハーフグラント　Vermont Studio Center［アメリカ］
2007年　アーティクル賞入選　(株)サンアド／東京
2006年　Asian Annual Awardグラント　Vermont Studio Center［アメリカ］
2005年　群馬青年ビエンナーレ'05（２作品入選）　群馬県立近代美術館／群馬

http://chihiroito.tumblr.com

稲垣美侑

INAGAKI Miyuki

眼差しの先

通り過ぎていく風景があった。西よりの窓から光の差しこむ昼下がり、仄暗い部屋の片隅でちらちらと木々の影が揺れている。晴れわたる真冬の空を横目に耳を澄ませると、遠くのほうから子どもたちが坂道を駆けまわる声が聞こえてきた。まるで丁寧に塗り重ねられた絵具層のように、瑞々しく、はてのない青が眼前に広がっている。また明くる日、庭先に赤い木瓜の花がほころび始める頃にはもうすっかり、道沿いにならぶ草木もほのかに色づきながら春を迎える準備を始めていた。

ふと気がつけば、住み慣れたこの街も歳月とともに少しずつその表情を変えていた。目に見えて空き地が増えたのもここ数年の出来事である。ぽっかりとひらけた土地は程なくしてならされ、周囲に軒を連ねる家々の外壁は心許ない姿で晒けだされている。消え去った家々の面影が思い起こされる機会も減った年の暮れ、白と名づけられた犬と近所を散歩するおじいさんに道すがら挨拶を交わし、そうして今日もまた坂の上の小さな街の一日が巡っていくのだった。

瞬くまに過ぎ去っていく日々のとるに足らない出来事が断片的な姿となっていつまでも脳裏に焼きついている。そのとき対象に向けられていた眼差しは、はたして何を捉えていたのだろうか。

元来、人間の記憶というものはひどく曖昧で、語られるイメージ自体も都度、脳内で補完したり、消し去ったり、あるいは繋ぎ合わせたりを繰り返しながら少しずつ「見ていた」ことの本来の姿に近づいていく。そしてそのようにして咀嚼された「イメージ」と名づけられるものにはいつも、個人に根ざした何らかの「色」が潜んでいる。真っ白なキャンバスの前に立つとき、私はその色を見てみたいと願う。日常に起こるさまざまな出来事の打ち返しとして表現が発露されるのならば、絵描きはいつも画面の内側へ、或いはフレームの外側や隣り合う空間を往復するように、そのあいだに生じる掴みがたい存在の輪郭を描きとろうと試みているのかも知れない。

時代を表象する「見る／見ていた」ことの臨場感、接触する呼吸の速度、描き手の身体の動き。途方もない画面との対話によって生まれる作品たちは、いまここに在ることを指し示すと同時に、過去と未来を接続する重要な役割をも担っているといえるだろう。

テクノロジーの発達や情報化が加速する現代において、個人の身体性や固有性の希薄化が危惧されるなか、「見る」「描く」という最も始原的な行為とその間に繰り返される対話に向き合うことは、日常において私たちが使用する言語と呼ばれるものの枠組みを押し広げ、新たなる想像の活路を導きだす大いなる手立てとなるのではないか、と考える。

足元を、そしてその周囲のとるに足らないものことを日々丹念に拾い上げてみる。そのようなしごく単純で地道な行為の集積がいずれ大きな波紋となって対岸に届くことを信じている。

スカラシップを通して

表現と描画材を切り離して考えることはできないが、自身の制作を素材の面から語る際に最も重要視しているのが「色材」と「溶剤」である。その透過性や可変性の魅力から絵を描き始めて以来、油絵具を主な描画材として制作を続けてきたが、今回のスカラシップでは出来るだけ今までに使用したことのない色彩や異素材を織り交ぜて発注し、意識的に選択肢を広げることで自身の表現の核となる素材との関わりを問い、繰り返し確認する機会を得ることができた。躊躇いもなく自由に色材を、溶剤を、絵筆を用いることができる。長く制作を続けていくうちに良くも悪くも描画材への大胆なアプローチが減ってくることは想像に容易いが、そのようなルーティンを打ち壊し、新たな表現を追求するうえでも今回の助成は大きな足掛かりとなった。

素材の美しさ、絵筆を画面に定着させた瞬間の緊張とイメージの飛躍。何より作ることに集中できる時間を得ることができる、描き手にとってこれほどまでに贅沢な喜びはないだろう。助成を受けたこの一年は幾度となくそのような感想が芽生えた。ありがとうございました。

Window
油絵具、キャンバス
72.7×60.6㎝
2018年

所在の輪郭
油絵具、キャンバス
鏡、ガラス、パネル
サイズ可変
2017年
photo by 縣健司

稲垣美侑

1989年　神奈川県生まれ

2014年　東京藝術大学 美術学部絵画科油画専攻 卒業
2017年　東京藝術大学大学院 美術研究科絵画専攻油画 修了

個展
2018年　ちぐはぐ、窓辺からの綴　株式会社ベリタス／東京
遠い遠い、そとはあかるい　Gallery Gigi／神奈川
瞬きのうちに　経堂アトリエ plum café & gallery／東京
2017年　所在の輪郭　東京藝術大学絵画棟内／東京
2014年　稲垣美侑展　台東区環境ふれあい館ひまわり／東京

グループ展
2019年　Count the Waves - 見えないものをつなぐ　東京藝術大学 陳列館／東京
パラランドスケープ 風景をめぐる想像力の現在　三重県立美術館／三重
2018年　綴り　あとがき　株式会社ベリタス／東京
KAMEYAMA展　Bank Bed Gallery, Guest House 田家／東京
綴り　まえがき　株式会社ベリタス／東京
2017年　石橋財団・東京藝大油画 海外派遣奨学生展　東京藝術大学陳列館／東京
亀山トリエンナーレ2017　岡田屋 月の庭／三重
アート・イン湯宿2017　湯本館 みなかみ町湯宿温泉／群馬
Through The Glass　AGC Studio／東京
新鋭アーティスト発信プロジェクト A-Lab Artist Gate 2017　A-Lab／兵庫
Drawing Water DIG TOKYO 2016 - QCA,藝大,女子美　AIR3331／東京
アート・イン湯宿　みなかみ町湯宿温泉／群馬
2015年　亀山トリエンナーレ2017プレ企画展　市指定文化財 旧舘家／三重
熊野古道美術展 紀伊長島2015　紀北町 民家アニタ／三重
2014年　アート亀山2014　市指定文化財 旧舘家／三重
2013年　アート亀山2013　東町商店街 民家／三重

受賞歴他
2017年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2015年　石橋財団 短期派遣プログラム　奨学生

パブリックコレクション　みなかみコレクション／群馬

岩本麻由

IWAMOTO Mayu

余白と風景

立ち並ぶ家々。取り壊されるビル。規則的に列をなす街灯。傾き、崩れるフェンス。濃淡をつけた木々。どこまでも続いていく川。

日々の風景は在り続け、通り過ぎてしまいがちで、忘れ去られていく。何の感情にもならない「無感覚の風景」といえる。私はそうしたすでに見馴れている風景から、何かを見つけたいのである。

不確かな言語化しようのない感覚で、「色」や「かたち」に出会い、拾い集めていく。それらをときには触れて確かめ、写真やドローイングによって記録し、取材する。イメージをレイヤーのように重ね合わせていき、別の風景をつくっていく。

モチーフに反復や変化、時間設定を与え、足しては削り落とし、繰り返し再構築をする。小さな仕掛けをしながら、楽しみ、遊ぶ。そして見ることも名付けることもできない風景には無題である「Untitled」を、言葉を添えたい風景にはタイトルをそれぞれつけていく。

支持体にはキャンバス、又は紙を扱い、油彩で描く。油彩は、イメージが層となって蓄積し、構成していくように、色の皮膜を積み重ねていくことができる。だが、重層感や重厚感だけではなく、マット感、半光沢感、光沢感といった様々な絵肌や艶もつくることができ、色域がとても奥深いと感じる。

キャンバスと紙は、「絵の風景」の見せ方が異なる。それぞれの支持体にある作品画面の枠組みが要因だと考える。これらの枠組みは、額縁といった物理的なものではなく、「絵の風景」の範囲を決定する境界線のようなものである。キャンバスは、目には見えない枠に囲われており、まわりの空間との間に境界線が引かれ、切り離された「窓」のように「絵の風景」を見せる。一方、紙は枠がなく、制約がないと感じる。「絵の風景」はまわりの空間へと広がり、馴染み、見せる。

支持体のどちらを選ぶかは、「余白」に関係がある。「余白」は「絵の風景」をつくる一つの表現だと考える。そして、何もない日常の「無感覚の風景」にどこか似ていると感じる。「余白」が「窓のようなキャンバス」、又は「窓枠のない窓のような紙」を選び、それぞれの支持体に行き着く。

過ぎ去られ、使いみちがわからない日常の「無感覚の風景」は、見つめれば見つめるほど、「かたち」や「色」が無数に在ることに気がつく。絵に耳を澄ませると、さまざまな声や言葉が聞こえてくる感覚になり、会話をし、描く。「絵の風景」は「余白」が広がり、「かたち」は音を無くし、静かに佇んでいる。

スカラシップを通して

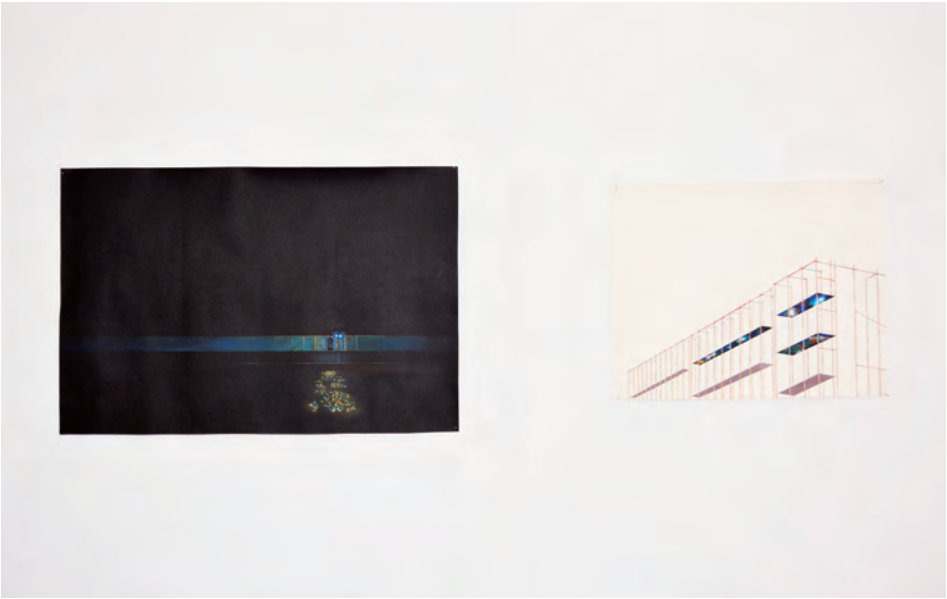
じっくり素材を実験しなければと思い、小さなキャンバスや紙の切れ端に、扱ったことのない画用液や色を試した。

たとえば、新たなマチエールをつくるため、溶き油を調合し、光沢・固着力・厚みを調整する。さらに筆でストロークをした時の感触、乾燥所要の日数、変化していく過程を詳細にスクラップブックやノートに書き記す。はじめて触れる色も発色性、透明度を窺い、色見本をつくる。

こうした素材とのやり取りや継ぎ接ぎの観察日記に、約半年をかけた。扱う道具も変わり、アトリエに調理器具が増えていた。まるでお菓子づくりをしているように見えると家族からいわれるほどである。

新しい素材が加わり、工程や時間の過ごし方、感覚が少し変わり、「絵の風景」は以前とはまた異なった表情を見せる。おだやかな光沢をもつ柔軟な塗膜になり、不思議な色合いが広がる。

綴りためた素材のレシピ本は、「絵の風景」の表現、そして選択を増やし、絵との会話や時間をより長くするのではないかと感じる。



Untitled Scene
鉛筆、水彩、パステル、アクリル絵具、紙
左 35.3×53.2㎝　2019年
右 29.0×36.5㎝　2018年

Untitled
油彩、紙
左　320.0×238.0㎝
油彩、キャンバス
右　182.0×227.5㎝
2016年

岩本麻由

1991年　大阪府生まれ

2014年　女子美術大学 芸術学部美術学科洋画専攻 卒業
2016年　女子美術大学大学院 美術研究科美術専攻洋画研究領域 修了

グループ展
2017年　シェル美術賞2017　国立新美術館／東京
2015年　Coil no.6 陽炎、稲妻、水の月　ギャラリイK／東京
2014年　Shanghai Joshibi Art Gallery Award ドローイングコンペティション　女子美アートギャラリー／上海［中国］
第50回神奈川美術展　神奈川県民ホール／神奈川

小形有希

OGATA Aki

絵を描く目的と考察

眩しいくらいの太陽の光を感じたことはありますか。草を踏みしめる音を聴き、湿気を含んだ空気を胸いっぱいにためて呼吸したり、誰にだってそういった経験はあると思います。私の絵はそれらのような誰もが見たことある景色や経験を元に描いていて、絵には鑑賞者の見たい世界が投影されていれば良いと考えています。というのも「人の心や感性に届く絵」、絵は人に見られるために存在するのですから。

加えて何がテーマであろうとどう描かれていようと、絵には描き手の視点が素直に表れますし、真似できたとしても自分の内側と結びつかない限り、作家自身の表現は成り立たないと信じています。

私は学生時代から何をどう描けばいいのか、描かれたものが何と結びついているのかプロセスを意識するようにしています。絵を描くことは内省とキャンバスがつながる行為なので、アイデアやメッセージ、実験検証や訴えなど、さまざまな色や形になって収められています。だから鑑賞者を遮断することもできます。絵の性質として、キャンバスに描かれたものは世界を切り取っているからです。でも私はできるだけ鑑賞者の見る世界と何らかの接点があればと願って絵を描いています。これは実体験に基づいて決めたことです。

ある日外に出て筆を走らせると、余計な物事がすっと遠のき、自分が大きな世界の一部であることに気づきました。また、これまで吸収しきれないほどたくさんの絵を見て、良いと感じる絵には何かが宿ると教わりました。良いの定義は何か人によって違いますが、私は「琴線に触れること」だと感じています。

感覚的な経験を具体的な言葉で伝えることが難しいのですが、例えばモーリス・ドニの礼拝堂で祈る絵を見たときに、とても薄い絵の具の層が空間を存在させてたこと、美しさと静寂をよく表していると思いました。セザンヌの肉感ある筆致にも色あせない存在を感じることができます。キャンバスの筆跡や色一つ一つが実際の物事だけでなく、情景を伝えているのです。ドニもセザンヌも鑑賞者に開いた絵を描いているのではないかと考えました。

つまり、キャンバスの中に留まるのではなく、枠の中におさまらない世界の存在を感じるよう心がけることが重要なのです。だから、私の制作の始まりは冒頭のような感覚に頼りつつ、記録をつけるように同じ時間にスケッチしたり、一つの場所・物事を多面的に知ろうともします。

絵を見てどういった過程があったのかに興味がありますし、鑑賞者に必要とされる良い絵を念頭に置き、絵を描くことを繰り返してきました。これからも自分にしかできないことを大切にし、人生をかけてその境地に近づきたいというのが、私の絵を描く目的です。

スカラシップを通して

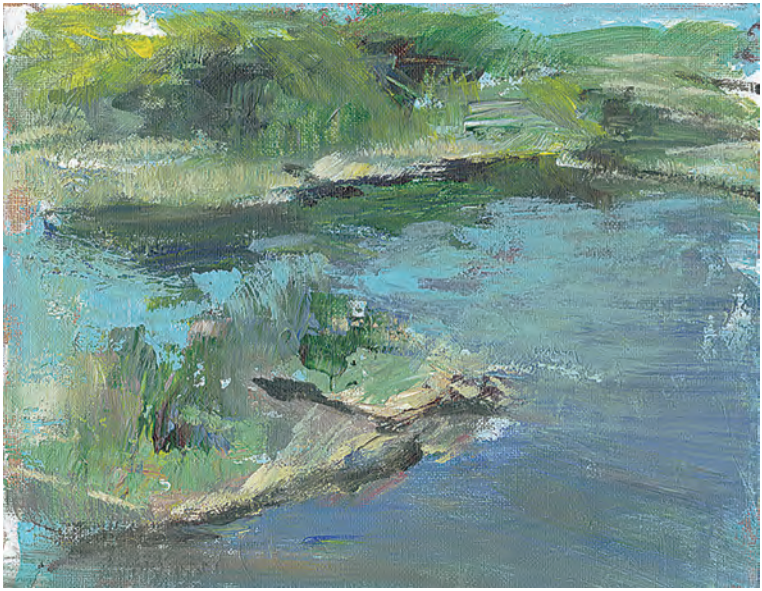
高校で油絵具を初めて使った時、難しさと同時に自由も感じたあの感覚が忘れられません。油絵具の良さを知ってからは、大学で描画材料について学ぶことの重要性を教わり、学んだことを自分の制作に落とし込む時間はかけがえのないものだったと気づきました。

スカラシップを通して再びその経験を味わうことができています。これまでに使用したことがある油絵具・アクリル・水彩絵具などと、使用したことがない材料を受給しました。支持体・画材の違いは表現に表れるので、選択肢が多いのは貴重な経験でした。同じテーマでも絵具の厚みや配色で幅が広がるからです。

また吸水性の下地を一から作ること、顔料からテンペラ絵具を作ることなどこれまで習った技術の他に、スケッチ用の描画材やガラス用プライマーを試せたことは良い機会でした。オイル類を多量に受給できたこともありがたかったです。

臆することなく可能性を探ることができたのはスカラシップがあったからで、今後の制作に大きな影響を与えたと

水面
アクリル絵具、キャンバスボード
22.0×27.0㎝
2018年



夏草
アクリル絵具、キャンバスボード
22.0×27.0㎝
2016年

小形有希

1989年　福岡県生まれ広島県育ち

2011年　広島市立大学 芸術学部油絵専攻 卒業
2013年　広島市立大学大学院 芸術学研究科博士前期課程 修了

グループ展
2017年　チャレンジとくしま芸術祭2017　徳島県立近代美術館／徳島
2016年　昼と夜　小形有希と元隆による二人展　櫻ギャラリー／徳島
2012年　ギャラリーへ行こう2012　数奇和／東京／滋賀

受賞歴他
2017年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2016年　三菱商事アート・ゲート・プログラム　第31回入選
玄光社 イラストレーション主催　第199回 ザ・チョイス 牧野千穂 最終選考
第４回 東京装画賞 2016　１次選考通過
2015年　玄光社 イラストレーション主催　第194回 ザ・チョイス いとう瞳 最終選考
2014年　三菱商事アート・ゲート・プログラム　第23回入選

小野仁美

ONO Hitomi

絵画の表面を触れるために

私の制作はイメージやエスキース、クロッキーなどから頭の中や紙の上で計画して始まるものではない。始まりは無作為に絵具が落ちる、または流されたタイミングから。パネルに湿って張り付いているポリエステルの布に色が染み込み制作が進んで行く。色を落として、さらに表情や深さを加えようとする時には、上から異なる色や水を落として、元々落としていた色を押し流す。一日の制作に区切りがつけば、制作途中であっても作品の表面は乾き、改めて描き始める時にはまた湿らしてを繰り返す。

混ぜられた絵具が布に染み込み、画面の表面で伝わってゆくとき、光がプリズムの中を通過し分光されるときのような、色の縞が現れてくることに気付いた。色の縞は乾き切った時にそのまま定着するようだとも。綿布を使用していた時には水分のみの層まで現れていて、その部分に対しては居心地の悪さを感じてしまった。色とそうでない部分の境界に作品の外から光が当たって反射し際立つ。色が奥から吐き出される。言い換えてしまえば、息を吸って吐くような感覚。その感覚を受け取りながら、また新たに色を重ね、染み込ませる。その行為を何度も。やがてそれは私が作品に対して求めている、水面を眺めている時の映っている景色や物の影を美しく思い、それを見ようとしているのか、または湖の奥底を探り見ようとしているのか、それとも水面そのものを見ようとしているのか、といった見るものの焦点の移り変わっていく様子に繋げていく。

私が作品の画面に求めている深さの距離間はどれほどだろうか、と考えることがある。深さにつなげるものとして川で例えるならば、淵という部分があり、瀬と反対で、流れが穏やかな深みのある場所である。静かで淀んだ部分もあり、底からの光の照り返しも鈍くぼんやりとなる。私が求めている奥行きというものは、どこまでも透き通る深さをたたえた水面のことだろうか。それとも瀬のように、ざわざわと不安定な揺らめきを持った境界なのだろうか。

私の個人的な触覚であり、他人には伝わりにくいものであると感じているが、最近では色を押し流す遣り取りは動物の毛を梳き流す行為にも似ていると感じる。これは私が猫の毛の見え方に興味を持っていたことにつながる。猫の毛は猫の皮膚からふさふさと生え、私たちに見えているのはその毛先。加えて、毛と毛の隙間をたどってわずかに白に近い毛の根元や淡い皮膚の色が見える。手のひらで毛先を押し返すように、もしくは掻き分けるように触ると、毛の根元（皮膚）まで辿り着く。毛と毛の間には空間があり、毛先と皮膚という二層の境界があるのだと気付く。ここで視覚的にもレイヤーのような見え方をしているのだと頭の中でも思い浮かべる。この二層間のずれた見え方に心が惹かれ混乱し、今のところは少しでもその触れてしまいたい欲求を叶えてくれる画面に辿り着けないだろうか、とワクワクしている。

スカラシップを通して

私は制作において画材は主にアクリル絵具、ガッシュを使用しています。ドローイングでは紙に水彩を。パネルに描く作品には、ポリエステルのオーガンジーを重ねて湿らせ、混ぜ合わせた絵具を染み込ませていきます。最近は絵絹などにも試す余裕が出てきました。スカラシップに通ってからは、画材面においてゆとりを得られたことから、今までの制作の中で試してみるという考えに至らなかった素材にも、挑戦できるようなタイミングに恵まれました。スカラシップに通った年は、学生最後の年でもあった為に、大学の外に出た時どのように制作を続けるのかという課題に加えて、個人的にもこの先どうなるのか予想のつかない状況にだんだんと変化する不安が重なり合っていた折りでもありました。

その時の自宅に届けられた奨学生認定の通知はありがたいものでした。

制作の中での振る舞いは画面の中、直接的なものだけにあるのではなく、どの色、どの素材を選ぶのか、だけでもなく、布を縮み無く伸ばし、絵具をそこに流して色の中に潜む色を呼び起こすこと等、大切な行為が沢山存在することは確かですが、画面を傷つ

垣間見
アクリル絵具、絵絹、ジェッソ、木製パネル
24.3×19.5㎝
2018年

けない水含みのいい筆を前もって選ぶこと、といったことも私にとっての一つの身構えです。

今回スカラシップの支給品の中で筆を選択できることは私にとって大変楽しみなことでした。刷毛はナイロン製の、柄の部分がコーティングされていないものが好みです。筆先は化粧筆と見紛うような肌を傷つけず滑らかで、自分が指で触っていても、その筆を愛おしいと思うくらいの柔らかさがあって欲しいと思います。画材店で手に触れて見て手元に置いておきたいと思った筆は頂いたカタログで確認して頼んでみました。制作スタイルにもよるのでしょうが、私にとっては一本の筆が長い付き合いになります。スカラシップは私にとって画材の支援を受けられるというだけではなく、今後の作家活動のモチベーションに繋がっていきます。

生っぽい肌ざわり
アクリル絵具、ポリエステル布
ジェッソ、木製パネル
91.0×91.0㎝
2016年

小野仁美

1993年　東京都生まれ

2016年　武蔵野美術大学 造形学部油絵学科油絵専攻 卒業
2018年　武蔵野美術大学大学院 造形研究科修士課程美術専攻油絵コース 修了

個展
2018年　池袋アートギャザリング 北嶋勇佑プロデュース企画 小野仁美 作品展　リビエラ カフェ green style／東京
　　矯めつ眇めつ　アートスペース88／東京
　　Roppongi α Art Week　六本木605画廊／東京
　　際に潜む、縁に佇む　平成29年度 武蔵野美術大学 卒業・修了制作展　武蔵野美術大学／東京
2017年　揺蕩う淵　たゆたうふち　montanO-librO（モンターノ・リブロ）／千葉
2016年　虹をさがして雨音をつれゆく　画廊開設35周年記念　アートスペース88／東京
　　湖の奥底を探りながら、水面の存在を確かめるように　平成27年度 武蔵野美術大学 卒業・修了制作展　武蔵野美術大学／東京

グループ展
2018年　Slide,Flip, and Turn/スライドフリップ アンドターン -7人のアーティストブック展 -　武蔵野美術大学美術館図書館／東京
　　（財）神山財団芸術支援プログラム　第4回卒業成果展　FEI ART MUSEUM YOKOHAMA／神奈川
　　ギャラリーへ行こう2018　数寄和／東京　数寄和大津／滋賀　入選（ '16、'17）
　　池袋アートギャザリング 池袋回遊派美術展　東京芸術劇場／東京
2017年　行**丼**中的――日本青年**艺**术家群展　言午画廊／上海［中国］
　　三菱商事アート・ゲート・プログラム 第34回チャリティー・オークション出品作品展示　EYE OF GYRE／東京　入選
2016年　理化学研究所展示プロジェクト2016　理化学研究所 横浜キャンパス／神奈川
　　ワンダーシード2016　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京　入選

受賞歴他
2018年　平成29年度 武蔵野美術大学 卒業・修了制作展 研究室賞
2017年　80周年記念 武蔵野美術大学大学院修士課程奨励奨学金 認定
　　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2016年　神山財団芸術支援プログラム 第３期
　　一般財団法人守谷育英会修学奨励金 奨励賞

http://okojonohitomi.tumblr.com/

香月恵介

KATSUKI Keisuke

未だ見ぬ光へ

写真、映像を始めとした媒体の電子化は極端に進んでいる。我々が何かについて調べるとき、ハイパーテキストをはじめとした文書書式によって記述された情報をコンピュータが演算処理をしディスプレイに表示されるものは何か、それは画像である。広義ではディスプレイが表示したものは全て画像となる。紙媒体は衰え、あらゆる情報は画像の領域に属しつつある。私たちはあまりにも画像に慣れ親しんだがゆえに、それなしでは情報ひとつ得られない状況を迎えようとしているのだ。

現代生活に於いて私たちは画面を見る時間に多くの時間を費やし、自らの眼でものを見る以上のリアリティをそこに映し出す。それは現実にものごとを目の当たりにした際にインターネットで得た情報を思い返してしまうほどに我々の身体に根付いている。

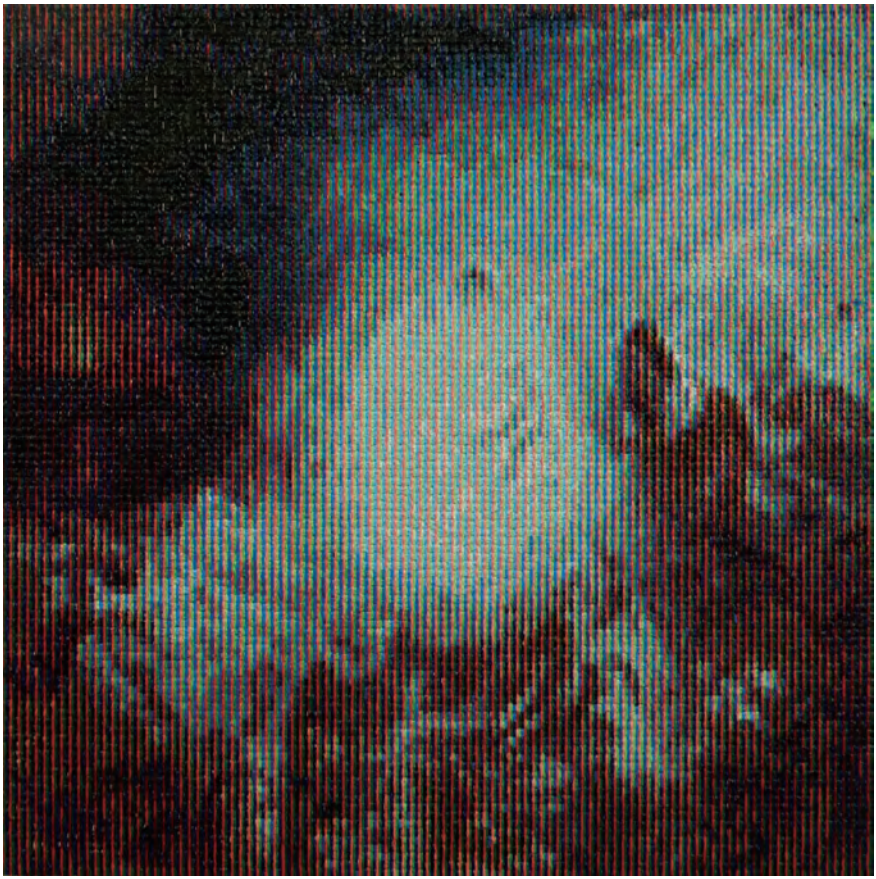
目の前に表示された画像とはなんであろうかという問いから私の制作は始まっている。子供の頃にブラウン管テレビに近づくことで見えた三色の光は、今となっては肉眼で見ることができないほど微細になり巧妙に隠されてしまった。これは表示される画像がもっともらしく現実に近くなるということであるし、同時にディスプレイという媒体が消滅するということでもある。これは画像と眼が媒介なしに接近し統合される感覚とでも言えるかもしれないが、それは擬似的に直接的な経験へと導くための所作であり、近年発展が目覚ましいVR(仮想現実)の分野につながってもいるだろう。

私が「Pixel Painting」によってモネの睡蓮やターナーの光をピクセルの構造を用いて描くのには、絵画における反射光と自らが発光するピクセルの関係性においても重要だが、理由の一つには写真機の登場によって19世紀末の絵画に起きた変化と現代の私との繋がりを考えることにある。モネは画家として他の誰にも見ることのできない風景を「印象」によって作り出したのであるし、ターナーはその数十年前に霧や光によって溶け合った風景を自らの眼と感覚とによって描き出した。私は絵画作品を展覧会で見た後、その作品を検索して画面に表示された画像を見ることがあるが、その時には奇妙な感覚を覚える。実物のモネやターナーの絵画を見ることよりも、私の現実は画面から発される光にあるという気づきだ。これは情報過多な現代生活が現実の経験を貧しいものにしているということもできるが、ネガティブなものではなく今、画面の前にいる私のリアリティはここから形成されているということでもあるはずである。

私はこの小さなリアリティを手にするために光を現実に反復して描いているにすぎないかもしれないが、写真機の登場によって風景を色彩と筆致へと解体した画家のように、発光する画面から新しい創造行為を試しているのであろう。そしてこの積層の先に未だ見たことのない光景へとたどり着けることを信じて。

私は絵画が物質（モノ）である、ということにも重きを置いて制作しています。それは絵画が像と支持体を両義的に持ち合わせていることにも依りますが、画像をわざわざ絵画へと変換して描くことからも非常に重要なことと考えています。ホルベインのアクリル絵具はインク、フルイド、ヘビーボディなど様々な粘度の絵具があり、制作には素材から着想を得ることもよくあることなので今後とも非常に楽しみといえます。

ちなみにこちらでは掲載しませんが、ここ数年で制作を始めた「Gray(Medium)」というシリーズがありまして、この作品は画材、素材によって色彩や表情が大きく変化する絵画となっています。これは光と絵画に関するスタディで、画材の組み合わせによって表面が左右されるため、今回のスカラシップから継続的に制作を進めることができ、多くの助けとなる期待を持っています。



Undine giving the Ring to Massaniello,Fisherman of Naples 1846
アクリル絵具、パネル
79.1×79.1cm
2018年

香月恵介

1991年　福岡県生まれ

2014年　東京造形大学 造形学部美術学科絵画専攻 卒業
2016年　東京造形大学大学院 造形研究科美術専攻領域 修了

個展
2018年　Les Nymphéas　EUKARYOTE／東京
2017年　Image in the Light　Lower Akihabara.／東京
2015年　Color Without Color　Art Complex Center Tokyo／東京
　　Filled with Light　Lower Akihabara.／東京

グループ展
2018年　NOUMENON　TAV Gallery／東京
　　PREVIEW　EUKARYOTE／東京
2017年　rgb+ 2017 exhibition vol.9　ZOKEI Gallery／東京
　　Japanese Contemporary Art Show　La Lanta Fine Art／バンコク[タイ]
　　CIRCUS vol.1　SEZON ART GALLERY／東京
2016年　rgb+ 2016 exhibition vol.8　ZOKEI Gallery／東京
　　iphone mural　BLOCK HOUSE／東京
2015年　Two Truths　Grifin Gallery／ロンドン[イギリス]
2014年　リキテックスアートプライズ 2014　Arts Chiyoda 3331／東京
　　ZOKEI展　東京造形大学／東京

受賞歴他
2017年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
2014年　リキテックスアートプライズ 2014 グランプリ

keisukekatsuki.com

The Angel Standing in the Sun 1846
アクリル絵具、パネル
79.1×79.1㎝
2017年

香月美菜

KATSUKI Mina

深呼吸

私は人間だ。社会の中で生かされている。けれど時々そのことを忘れて深呼吸したくなる。初めて深呼吸できた場所は大きな樹の前だった。父と母に連れられて出会ったその樹を子どもだったから大きく感じたのかもしれない。今再会したらそんなに大きくないのかもしれない。しかしもう再会できない。地元の人だけに有名だったその場所はパワースポットとして紹介されて、観光客に荒らされ、入れなくなったらしい。ああ、深呼吸をしたい。誰にも接することなく大自然のなかで深呼吸したいと、電車の中、遠くの山を見てそう思う。しかしその山は建物が邪魔をして見えなくなり、そして建物の群衆が過ぎ、また顔を出した時にその頂上に送電塔を見つけてウンザリする。本物の自然なんてどこにもないのだろうか。しかし本物か偽物かは個人の主観でしかない。私が送電塔のある自然を愛せば、許せば、送電塔を見ないふりをすればここまで泣きたくなることはない。しかし我儘なせいか、それはできない。

二回目に深呼吸ができたのは大きな抽象画の前だった。大量の絵具があるがままにキャンバスを彩っている。ただそこに存在する絵画に目が離せなくなった。何を考えていたのだろうか、たぶん何も考えていなかった。ずっとその絵画の前で深呼吸をしていた。正直、アートの文脈や今の時代に抽象画を描くことについて語ることは私にはできない。興味がないし、そこに私の使命がないように感じる。私は私のように深呼吸がしたい人の為に作品を作りたい。

私の作品は「素材／マテリアル」をテーマにしている。素材は自然物と人工物の間にある存在だと思うからだ。素材は何かに使われる、形を変えることを前提とした存在だ。その中でも絵具は木や粘土の様にこの形や色が絵具という定義がない。私の中では絵具は他の物質よりも曖昧な存在ように感じる。そのような絵具を絵具としてキャンバスに表現したいと思った。屋久島の杉の樹も街路樹も木であるように、どのようにキャンバスを彩っていても絵具は絵具だ。だからはじめは私の意のままにキャンバスを絵具で彩っていた。

しかしある時、私の意思は送電塔の様だと感じた。きっとそんなものが場所では深呼吸はできないだろう。先ほど私が言ったように本物か偽物は個人の主観でしかない。だかしかし、私は私の中で本物を探し、それを生み出したいと思った。そこで私は自分の意思がなるべく反映されないような作品の作り方を考えた。キャンバスを寝かせ、そこに大量の絵具をのせ、刷毛で一気に伸ばす。それで完成だ。それ以上は絵具に手を付けない。そこに現れる絵具は毎回私の思いがけない表情を見せてくれて一緒にいて楽しく思う。そして私は作品の前で深呼吸をする。

私は人間だ。社会の中で生かされている。けれど時々そのことを忘れて深呼吸したくなる。私と同じような人が私の作品を見て少し深呼吸してくれることを願う。

青い絵具の塊

私は一年を通して同じ素材を使い続けた。主に透明の青い絵具とジェルメディウムしか受給しなかった。スカラシップの制度を使用する前はインダンスレンブルーのみを使っていたが、新しくフタロターコイズ、フタロブルー、フタロブルーレッドシェード、モーブをしようしてみた。それにより淡いブルーから濃いブルーのグラデーションの色数が40色から127色まで作れるようになった。5色の青色で作られた一つの青い絵具の塊は今までとは違う風合いが出て新しい表情と出会うことができた。また大量に混ぜた絵具をタッパーの中で放置すると絵具の中の気泡が固まり面白いテクスチャーができることや、とある方法を使用するとインダスレンブルーのなかに混ざったモーブだけが溶け出して画面を染めることなどを発見することができた。元々素材をテーマに作品を作っていたので、素材研究は制作の一部なのだが、大量の絵具で研究できたことはとてもありがたかった。

それだけではなく、とても面白いと思ったことがある。それは環境により絵具の固まり方、表情が違うことだ。同じことを一年に渡り繰り返し続けたことで夏の表情と冬

3:04:53
アクリル絵具、アブソルバン、麻布、木製パネル
116.7×91.0㎝
2018年

の表情、日本の表情と海外の表情が違うことに気づいた。
今は新しい発見と様々な絵具の表情を楽しんでいるが、いつか世界で一番美しい青い絵具の塊を作りたいと思う。それにはホルベインの絵具が不可欠だろう。

0:53:47
アクリル絵具、ジェッソ
綿布、木製パネル
72.7×60.6㎝
2017年

香月美菜

1898年　福岡県生まれ

2014年　九州産業大学 芸術学部洋画コース 卒業
2016年　京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻ペンティング油画 修了

個展
2018年　福住画廊／大阪
　　Gallery M.A.P／福岡
2017年　福住画廊／大阪

グループ展
2018年　未藝術空間 WINWIN Art Gallery／［台湾］('16)
　　下鴨茶寮／京都
　　International Art Camp Ⅱ-2018 Solo・Indonesia／［インドネシア］
　　アート釜山／［韓国］
　　Artist' s Fair Kyoto／京都
2017年　uJung Art Center／［韓国］
　　Sasaran International Art Festival 2017／［マレーシア］
　　TAIWAN ANNAUAL Art Fair／［台湾］
2016年　木津川アート 2016 ／京都

受賞歴
2016年　第３回CAF賞 入選／東京
　　a.a.t.m 2016 shu uemura賞／東京
2015年　トーキョーワンダーウォール2015 大賞／東京

mina-katsuki-artist.tumblr.com

国本泰英

KUNIMOTO Yasuhide

現在の制作について

自身の生活を取り囲む情景や、インターネット、雑誌などで得た様々なイメージの中から人を抜き取り、再構成して描いています。

題材として取り上げる場面は大きく二つに分けられます。

まずはスポーツ。理由を端的に言うと、ただ単にスポーツが好きだからという事です。

子供の頃は体育の時間になると嬉しい。サッカー、野球、ドッジボール、バスケットボールなど、特に球技が好きでした。それから観戦することも好きです。中学生になると自室とテレビを与えられ、野茂英雄の活躍などの影響もあって海外のスポーツなども観るようになります。

スポーツを作品にする際、例えばサッカー選手がシュートを放つ姿、ピッチャーの投球動作、スイマーの入水姿勢、力士の塵手水など、冷静に見るとおよそ日常ではありえない形態となる競技中の一瞬のフォームなどにも関心が向きます。

二つ目は街角での人々を意識したもの。行列や交差点など、普通に目にする光景の再現を目指しています。

私たちはいつも群像の一員です。「個」として存在している私は、日々の多くの時間を群れとして過ごす中で、声や表情、におい、癖、そんな固有の要素を削ぎ落とされ、匿名性を帯びながらフラットな「人」へと変移していきます。そんな「個」と何物でもない「何か」との間を往還する存在として、街と仮定したどこかで交差する人々の姿を描いています。

どの場面を描く時も共通して、登場人物たちはインターネットや雑誌などで集めた写真や画像などからも躊躇なく採用していきます。バラバラに集められた「キャスト」をキャンバスというステージに配置していくことで、再び状況のようなものが現れてくる。実際に目にしたものよりも、むしろその方が絵に他者性・多様性を与えることができるし、描かれたシチュエーションが一気に無意味＝フラットな「人」になる瞬間を持ち込むことができると考え、このような手法をとっています。

しかし、そうやっていくら個の気配を薄める作業を重ねても、鑑賞者は描かれたフェイクの行列や、プールサイドにユニフォームを揃えて並んだ子供たちの姿に自分や家族、友人などを探し、個を見出そうとします。これは、例えば映画の主人公やアイドルへ向けられる視線にも似ているように思うし、そもそも絵のソースとしているインターネットや雑誌の中へも向けられているものでしょう。

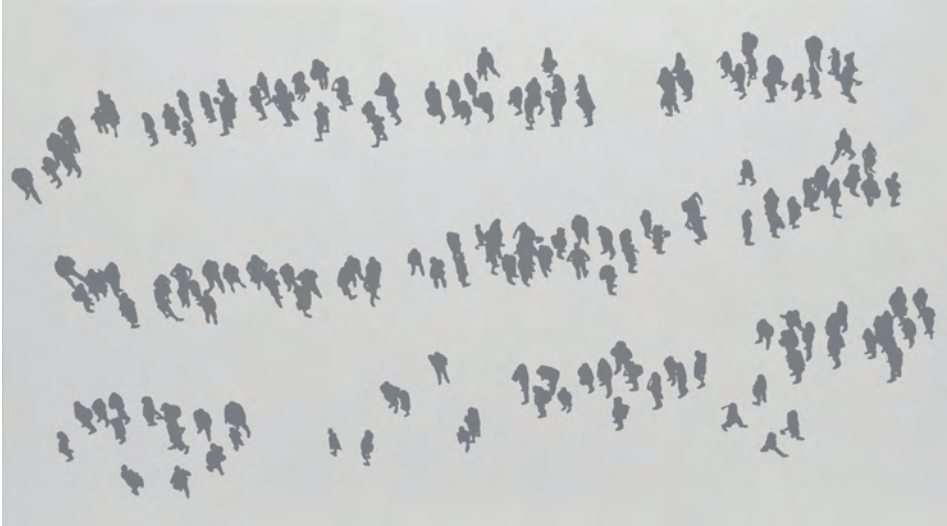
このような興味で現在、「人」に焦点を絞って制作していますが、思い起こせば少年のころ、ノートの端っこに描いたのは漫画やアニメ、ゲームに登場するキャラクターばかりでした。結局、人の形をした「何か」を描くという点では、その頃からの必然の流れの上に立って筆を走らせているに過ぎない、というのが本当のところかもしれません。

この一年間、本当にたくさんの材料を受給してきましたが、中でもメインで使用するアクリリックカラーヘビーボディは、色展開や発色、そして特に練りの硬さが私にとって理想に近いものでした。これまで他社のアクリル絵具を使っていましたが、調色はスムーズに、塗る際のコントロールも以前より効くようになり、この絵具の扱いやすさによって、おそらく無意識に感じていたであろう制作時のストレスが大幅に軽減されたのではないかと思います。

私は現在、大分県の田舎に拠点を構えており、細かな画材の調達ができない環境にあります。これまでは絵具が足りなくなって困るということもしばしばありましたが、この一年間はもちろん、今後しばらくは、その問題も解消した状態で取り組めるし、物量の余裕からより積極的な姿勢で制作することができています。

今回のスカラシップによって作品制作自体が劇的に変化したという事はありませんが、素材の変化によって、プロセスから仕上がりまで、多くの良い変化を得ることができましたし、今後長い時間に渡ってジワジワと効いてくるに違いないと感じています。

絵具の他にも様々な画材をいただきましたので、これから



Scene
アクリル絵具、キャンバス
65.2×116.7㎝
2018年

も自分なりの活用方法を試しながら探っていこうと思っています。

すもう
アクリル絵具、キャンバス
45.5×65.2㎝
2017年

国本泰英

1984年　大分県生まれ

2006年　九州産業大学 芸術学部美術学科絵画コース 卒業

個展
2018年　Nii Fine Arts／大阪('17)
2015年　Gallery M.A.P／福岡('07- '12、'14)
2014年　BASE GALLERY／東京('09)
2011年　銀座三越 8Fギャラリー／東京
2010年　Gallery Fukuda／大阪('08)
2009年　伊勢現代美術館／三重
2008年　由布院駅アートホール／大分
2007年　Art Space BAKU／福岡

グループ展
2018年　技の美　JILL D' ART GALLERY／名古屋
　宮崎アーティストファイル シンプル展　高鍋町美術館／宮崎
2017年　UMU - Q ―九州産業大学芸術学部優秀作品展―　上野の森美術館／東京
　WONDERS vol.3　MINA-TO／東京
　美の鼓動・九州　クリエイター・アーカイブ vol.2　九州産業大学美術館／福岡
2016年　遠景－近景1974―2016　ギャラリーおいし／福岡
　大分アートクロニクル　大分県立美術館／大分
　Local Prospects 2 -Identity-　三菱地所アルティアム／福岡
　国本泰英・宮城壮一郎 二人展　日田シネマテーク・リベルテ／日田、Bスクウェア／大分、GALLERY INDIVIDUAL／宮崎
2015年　BEPPU PROJECT 2015　別府中心市街地／大分
2013年　after words,　ギャラリー点／石川
2012年　祝CAMK10周年！ 九州アート全員集合展　熊本市現代美術館ギャラリーIII・井出宣通記念室／熊本
2011年　まちなかアートギャラリー　福岡
2010年　おとなりさん。―九大生ＡＱＡプロジェクトによる韓日現代美術展　ギャラリーアートリエ・九州大学／福岡
　井上絢子＋国本泰英　konya-gallery／福岡
2009年　Real Osaka　Bunkamura Gallery／東京
2008年　GEISAI#11　東京ビッグサイト／東京
　トーキョーワンダーウォール　東京都現代美術館／東京
2007年　ワンダーシード　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京

好地匠

KOHCHI Takumi

絵画が成立する根拠を問うような仕事がしたいと思っています。かつてのレリーフのような実験的な作品を経て、「メタクシュ」というタイトルから始まったシリーズは、近年、より絵画的なものへと向かっています。「メタクシュ」とは20世紀の哲学者、シモーヌ・ヴェイユの「重力と恩寵」に出てくる言葉で、「中間だけにあるもの」という意味です。松岡正剛のエッセイによって知ったその概念に惹かれながら、絵画本来の観念性を可視化、顕在化させるということを目指してきました。レリーフの作品では、紙に細かい切れ目を入れ、表側と裏側が絡まり合って垂れ下がるという構造をもっています。それは、表裏どちらでもない中間的な存在です。絵画自体、2次元的な物体に手前と奥を作っていくという観念的な中間領域と言えます。レリーフの作品は、そのモデルとして制作していたのかもしれません。そのモデルを経た絵画作品では、一見抽象的に見えますが、エスキスを事前に作り、システマチックで綿密なプロセスを踏んで制作しています。支持体は生の綿キャンバスで、そこへ任意の形の、アクリルで着色した薄い和紙を貼って仕上げています。和紙は、雁皮紙という文化財の修復などにも使用される、向こうが透けて見える程の極めて薄い物です。この色紙の形体は、紙が破れたり折れたり、捩れ曲がって裏返ったイメージなどから探っていきます。和紙を貼る場所へは、あらかじめ水彩色鉛筆やパステルでドローイングしておきます。ドローイングと色紙の形体は呼応していて、キャンバスと色紙の中間にドローイングが挟み込まれることになります。上に貼る薄い色紙の透過性のおかげで、下の色鉛筆やパステルの色と混ざり合い、より複雑な色彩が現れます。そのマットで工芸的な趣のある色調は、材料の性質によるところが大きく、かなりヴィヴィッドな色を使っても光を柔らく透過させ、トーンを馴染ませます。それは、私自身の体質にも起因しているのかもしれません。私自身は、それに向き合いながらも乗り越えたいと思っていますし、強くダークなトーンの絵にも惹かれます。キャンバスには、アクリルで直接ペインティングする部分や綿キャンバスの地を残した部分もあり、その部分は、より不透明な色調です。この透明と不透明の響き合いは、磨りガラスにセロファンテープを貼ると、そこだけが透けて向こうが見えるような現象と似ています。見えることと見えないことを同時に起こして、その「中間だけにあるもの」を拡げていきたいと思っています。また、ここ数年は、同じエスキスの絵から色彩やフォーマットを変えて複数描くことを試みてきました。それは、多様な可能性の中から判断と決定を繰り返し一枚に仕上げるという、絵画制作本来の態度とは異なるものかもしれません。それを諦めた優柔不断と取ることもできますが、絵と絵の間という「中間だけにあるもの」を拡げていく試みによるものです。

材料さえ決まれば絵のほとんどは完成している。

ある画家が私に語って聞かせてくれたその言葉は、絵画の制作現場において、イメージを引き出すには「材料とどう向き合うか」「材料をどう扱うか」という、材料との深い対話が欠かせないということを極端的に示していると思います。それは同時に、画家が自分の表現に最適な材料を見つけ出すという、一見簡単に思えることが、如何に難しいことであるかということを教えてくれる言葉でもあります。イメージと材料の絶え間ない往還なくして絵は描けないということですが、未だ材料を模索の段階にある私にとって、絵の完成はまだまだ先にあるということなのかもしれません。

絵画とは、基本的に「光と色彩」に関わることだと考えています。ただ、それらを絵画のなかで扱おうとするとき、概念ではなく「絵具」という物質（メディウム）として扱わなければならないことに、その難しさがあると実感しています。スカラシップでは、色鉛筆とパステルの箱入り全色セットを頂きました。どちらの材料も私の制作には欠かせないものですが、全色となると自前では買うことを躊躇するような、とても高価な代物

みかけ
和紙、アクリル、パステル、キャンバス
130.3×97.0cm
2019年

です。箱の中でグラデーション状に整然と並んだ色鉛筆やパステルは、どれも印刷のカラーチャートとはまったく異なる生きた輝きを放っています。世界中の色という色が採集されて「今ここ」にあるかような錯覚さえ覚えるほどです。それは私にとって、さながら絵画の在り処を示す色彩の地図のようでもあります。その地図を頼りに、決して絵の完成を急ぐことなく、これからも材料と向き合っていきたいと思います。

メタクシュー17
和紙、アクリル、色鉛筆、キャンバス
145.5×194.0㎝
2015年

好地匠

1978年　奈良県生まれ

2002年　東京藝術大学 美術学部絵画科油画専攻 卒業
2004年　東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程 修了
2007年　東京藝術大学大学院 美術研究科博士後期課程美術専攻修了 博士号取得

個展
2017年　Recent works　ギャラリー五辻／東京
2014年　好地匠展　ギャラリー五辻／東京

グループ展
2016年　絵画の体験を考える　ART TRACE Gallery／東京
2015年　FACE THE FAR EAST 極東垂直vol,4　ギャラリー五辻／東京
2014年　SCENE4　TIME & STYLE　MIDTOWN／東京
2009年　常総市まちなか展覧会　常総市／茨城('10、'11、'12)

小牟田悠介

KOMUTA Yusuke

色について

色は作品の大事な要素として扱ってきた。

絵を描く際に、はじめは頭の中でマルチカラーとしてあって、どの色にでもなれるような設定にしておいて始めることについて、なぜなのか明確な答えを持っていなかった。

そのことに関することで、好きな小説家、ポール・オースターの「幽霊たち」というに作品によって、整理されたことがある。全ての登場人物の名前が色となっている物語で、書き出しはこうだ。

「まずはじめにブルーがいる。次にホワイトがいて、それからブラックがいて、そもそものはじまりの前にはブラウンがいる。ブラウンがブルーに仕事を教え、こつを伝授し、ブラウンが年老いたとき、ブルーがあとを継いだのだ。物語はそのようにしてはじまる。（著者：ポール・オースター・訳：柴田元幸・一九九五年新潮文庫「幽霊たち」からの引用。）」

という一文からはじまる。黒、白、青、茶、赤、金といった人たちが、それ以外の設定は現実世界のままに物語を紡ぐ。それを読んでいる間、お笑い芸人ダウンタウン扮するゲイシャガールズの楽曲「Grandma Is Still Alive」という90年代に流行った歌詞で

「緑のカバンに五百万円入れて白の紙で黄色のカバンで言うて書きながら赤のカバン言いながら置いてくれたら俺黒のカバン言いながら取りに行くわ～（GEISHA GIRLS・作詞：Ken & Sho・作曲・編曲：坂本龍一・一九九一年「Grandma Is Still Alive」からの引用。）」

というフレーズが頭に浮かんでいた。ダウンタウンの初期の漫才「誘拐」に坂本龍一が曲をつけたもので、誘拐犯が身代金を持って行く方法を指示するところを、より詳細な色の情報を入れるという無意味なこだわりによっておもしろさが生まれる。当時からその中に、さらに別の何かに触れているような言葉の使い方が気になっていた。そのことが「幽霊たち」によって20年以上の時を経て思い出された。この2つの作品の面白さは、絵画において色がその色のまま存在する時の、現実世界との距離感であり、その絶妙な間合いを教えてくれる。ダウンタウンの「誘拐」の色は、会話の中で相手に物を説明するときに「あの赤いメガネの人」とか「黄色のカバンに入っている」とかいうときに、瞬時に身の周りのものから切り分けるときに使う指示するための色だ。一方、ポール・オースターの「幽霊たち」の登場人物は、はじめから違和感のまま、そしてその色の意味とは関係なく物語は進む。それは、黒田さん、白石さん、青木さん、茶山さん、赤井さん、金田さんでは違う。具体的な人名によって、物語の要素として中に入ってしまうのではなく、最後まで距離感を保ったまま成立すること。それが物語の構造に触れ続けるための適当な距離感なのだろう。

身の回りの様々な事象を、色のもつ抽象性に置き換えることによって、物語の構造に触れることができるのではないか。これが、自身の作品にとっての色の扱い方の需要な役割である。それぞれが色によってもつ印象に、寄り添ったり切り離したりしながら、そこから読み解く絵の中の仕掛けが作用する時に、絵のおもしろさは動き出すとおもう。

絵具に置き換えるために、様々な組み合わせが必要となりますが、今回はいつも作品制作では欠かせない下地作りのためのジェッソをたくさんいただきました。ホルベインのジェッソは乾燥後の塗膜はしっかりとしていて、それでいて平滑にする際の研磨も行いやすい可塑性を持っています。また気になっていたカラージェッソも全種類揃えることができ、そのことによって下地と上の絵具の上下の組み合わせパターンは増えることになります。また、エアブラシで絵具を吹くための色材としてアクリリックカラーフルイドやアクリリックインクとメディウムの組み合わせを試すこともできます。これまで絵具チューブから出したものを適した粘度になるまでジェルメディウムやペンチングメディウムで薄めていましたが、リキッドタイプはそれがスムーズで、混色もしやすくなりました。

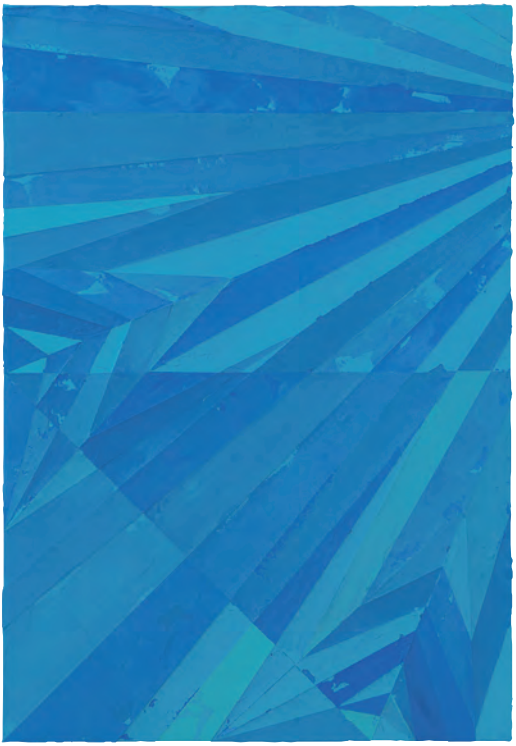
慣れた絵具の組み合わせだけでは、知らず知らずのうちに自分の色の幅を作ってしまいます。今回のように新しい素材、粘度、色の組み合わせを試す機会で、幅を広げ、自分のカラースケールを見直すことができました。

色彩は形から切り離すことはできません。媒介したもの

HBT#3
アクリリックインク、ガーゼ
49.0×55.0㎝
2019年

（媒質）が光を受け、色が生じ、その媒質には境界が生まれて形となります。身の回りのものは全てにおいてそうですが、ただ絵具だけが定型を持たず、色として、ただその色の意味を表わすことだけを目的として存在しています。そのことの自由さにたくさんの色のチューブが並ぶ時にはいつもわくわくします。同時にその自由さにプレッシャーも感じます。私の制作において、はじめに色数を準備することは、制作段階で必要な準備です。

Plane_Lancer
アクリル絵具、メディウム、綿布、パネル
162.0×112.0㎝
2013年



小牟田悠介

1983年　大阪府生まれ

2007年　京都造形芸術大学 芸術学部美術工芸学科 卒業
2009年　東京藝術大学大学院 美術研究科修士課程先端芸術表現専攻 修了

個展
2017年　Works on Paper　銀座SIX 蔦屋書店／東京
2013年　COLOR UNFOLDS　SCAI THE BATHHOUSE／東京

グループ展
2016年　瀬戸内国際芸術祭　犬島〔家プロジェクトI邸〕／岡山
Lines of Flight　Gallery EXIT／香港［中華人民共和国］
現美新幹線12号車　上越新幹線／JR東日本
2015年　Breaking through to the actual via the imagination Long museum collection show concept by Yuko Hasegawa
龍美術館／上海［中華人民共和国］
2014年　Yusuke Komuta & Daisuke Ohba　LEEAHN GALLERY／ソウル［韓国］
RADICAL PLATFORM 混沌から踊り出る星たち 2014　スパイラルガーデン／東京
ベネッセアートサイト直島　犬島〔家プロジェクト〕／岡山
2013年　KISS THE HEART #3　伊勢丹新宿店／東京
TOO YOUNG TOO BE ABSTRACT　SPROUT Curation／東京
TRICK-DIMENSION　TOLOT／heuristic SHINONOME／東京

城愛音

JO Aine

特別な時間

ある晴れた春の日、川辺一面に咲く菜の花が眩しく透き通る黄色にみえた。まるで色鮮やかな花束が投げ込まれたかのような、そんな眩しい絵を描きたくなった。また、祖母が生けた大きな百合の花が妙に気になり、はじめて花をモチーフにしてみようと思えた。

そんな春の少し肌寒い午後。私が最後にみた友人の眠る顔は白く冷たかった。ただその止まったかのような時間は非現実的でどこまでも透き通っているように感じた。あの瞬間を今でも忘れられないでいる。

絵を描くこと。それは「自分自身」を形にできる一番良い方法なのである。幼少期より傍にあり、喜びの一つであった。そんな私の作品に登場するイメージはどれも親しい身近な人物、主には私の家族だ。題材には複雑な理由がなく、人物の表情、話し方、好きなしぐさ、それら全てが絵の色やイメージの要素となっている。それは私の個人的な視点であり、そうして描いている人物たちはやはりどこか自分に似てくる。どれも「身近な人物」という鏡に映った「私」そのものだ。

また、絵は正直なもので生まれ育った土地や出会った人、興味のあるもの、日々の視覚的な事象が手を通して現れる。それらを組み合わせ、選びぬいた色や筆致で一枚の絵に丁寧に繋げていく。

こうして生まれた作品は一瞬の光や反射光を纏った時間の集積となり、金属的な輝きを放つのだ。

実際に作品と向き合う時、心地よい浮遊感を感じる事がある。描く行為に集中し色と筆致のみがはっきりと見えてくるようになり、他の情報はシャットアウトされる。いわゆるスポーツ選手で言う「ゾーン」に突入するようなところだろうか。私はこの感覚に陥りながら画面との対話の中で、多数の色とスピード感のある筆致をテンポよく奏でていく。それは音楽のようでもあり、機械の一定したリズム音のようでもある。例えば黄色を画面の下に、次は左上へ大きくストロークを伸ばす。こうしてキャンバスとやり取りをして色のリズムを探るのだ。

真っ白なキャンバスの上に眩しいほどの鮮やかな色を投じてみる。作品は言葉なく私に迫り、まるで時間が止まったかのように色彩の世界へ引き込んでゆく。

あの春の忘れられない午後、心の中に似たような浮遊感があった。そんな私のどうしようもない気持ちを絵は昇華してくれたのだ。今振り返ると友人との別れも純粋でかけがえのない私の日常の一部分であったと思える。

絵を描くこと。それは生活の一部であり、少しだけ非日常な出会いや別れを与えてくれる特別な場面だ。このことは自分にとって何もかえ難い大切な時間なのである。

ガラスのパレット

下地を塗った真っ白なキャンバス。新しく手にいれた鮮やかな色が、白い画面の上するすると伸びていく。オイルを程よく吸い込む支持体は、溶き油の調合と量によって様々に表情を変えるのだ。その様子は爽快で美しく、私は油と色の虜になったのだ。

絵を描き始めた当初、漂白されたような真っ白なキャンバスへかなりの抵抗感があった。今では、真っ白な画面におく最初の一手が一番心地よく思える程に。

私が、そう思えるようになったのは画材と道具による影響が大きい。やはり、絵を描く工程、行為はどの過程も私なりの美的感覚をくすぐるものであってほしいと考えている。そのため、私は欠かせず大切にしている道具がある。それは、大きなガラスのパレットだ。透明なガラスのパレットは光を反射しやすく、色をより鮮やかにみせてくれる。透明色との相性も良く、色を確認しやすいのも特徴だ。

そして何より、数種類の「私」の色が集まるパレット。一枚の大きなガラスの上には、新しく手に入れた高彩度なクリアな色も混色に失敗し濁った色もランダムに整列する。その様子は意図せずして絵画的

晩鐘
油彩、キャンバス
130.0×162.0㎝
2018年

でありアブストラクトな調和が生まれる。筆の動きは自由さがあり、油による偶然性、意図せぬ余白。悔しいけれども、それら全てが完璧だ。

そこから得られる発見は沢山あり、実際に作品に取り入れられる。

今回スカラシップでは、主に油絵具と画用液を多色数種類注文した。それら新色の扱い方のヒントを与えてくれたのも、ガラスのパレットの上だった。

真っ白なキャンバスでの緊張感が和らいでくる。

届かない
油彩、キャンバス
130.0×162.0㎝
2017年

城愛音

1994年　大阪府生まれ

2017年　京都市立芸術大学 美術学部油画専攻 卒業
2019年　京都市立芸術大学大学院 美術研究科修士課程絵画専攻油画 修了

個展
2019年　TAKU SOMETANI GALLERY／東京
　　ギャラリー恵風／京都
2018年　MEL NEON　芝田町画廊／大阪
　　short pieces　同時代ギャラリーshop college／京都
2017年　2016年度京都市立芸術大学作品展　京都市立芸術大学／京都
　　MELT MEL　同時代ギャラリー／京都

グループ展
2019年　Kyoto Art for Tomorrow 2019 新鋭選抜展　京都文化博物館／京都
　　ART FAIR TOKYO　Future Artists Tokyo　東京国際フォーラム／東京
　　ARTIST FAIR KYOTO　京都文化博物館別館／京都
2018年　ARTIST FAIR KYOTO京都アートラウンジ　HOTEL ANTEROOM KYOTO／京都

受賞歴他
2017年　2016年度京都市立芸術大学作品展 卒業制作展　同窓会賞
　　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
　　京都銀行美術支援制度　奨学生
2016年　国際瀧富士美術賞　優秀賞
2015年　第66回奈良県美術展覧会　知事賞

新直子

SHIN Naoko

不確かな世界 と 生命

幼い頃から田舎で自然に囲まれて育った。どの方角を見ても必ず向こうには山々が立ち、家の周りでは四季折々の花が咲き、野菜や果物を収穫して食べた。もちろんそこには様々な鳥や虫が集まってくる。ある程度分け合ってもいたが、食べ物を守るために戦いもした。それらの存在に興味を持ち、幼いながらに集めた種を植えてみたり、蝶の卵を採集し、成虫になるまで育てたりもした。その頃にはっきりとは自覚していなかったが、たくさんの生命に触れ、不思議さを知り、自分もその中のひとつであると感じていたように思う。

また、幼い頃から「自分の見方や価値観を絶対だと思っている人」に違和感を覚えていた。それは女子のグループや教師、テレビから流れてくるニュースやゴシップなど様々なところにあった。なぜ「自分は分かっている」「自分は正しい」と思うのだろう、なぜそれを強要してくるのだろう、と戸惑うことも多かった。

関東に暮らし始めてしばらく経つが、他の生き物が排除されたような環境に今でも慣れない。それは都心ほど顕著で、ヒトがつくった大きな巣だと感じるようになった。（もちろん私の故郷の様な田舎でさえも、昔と比べたらそうなりつつあるのだろう。）そういった場所があるのが悪いとは思わないが、それが当たり前だと思っている人が多いことに違和感を覚える。ヒトだけが特別で、他の生き物は「別の何か」の様な考え方。確かにヒトは優れた文明をもつが、それ以前に、広大な世界の一部で、その中の生命のひとつにしかすぎない。ヒトが知覚できるものだけでもそう考えられるが、そもそも「世界は圧倒的な力で満ち、蠢き、またたき、流れ、淀み、かたちを変えながら循環するようなもの」だと感じる。それはつまり、私を含め誰も決して把握することなど叶わないものである。そんな世界の一面を、私たちはさらにそれぞれの角度から見ている。その不確かな中で、私個人が確かに感じられると思うのは、「自分自身の存在と、周りで移り変わる自然、営まれる生命」である。

私は現在、そういった不確かな世界を知ろうとしたり、感じられるものを確かめたりする行為として絵を描いているのだと思う。だから“こそ自分自身の身体性と物質性が伴う、原初的な絵画という方法に至っている。また、それは「何かメッセージを伝えたい」といった手段ではなく、行為自体が目的ということである。結果として現れる画面に一貫性が無いととられることもあるが、世界や生命のあらゆる側面が出てきて然るべき表現であり、それこそが自身の作品であると考えている。

ソクラテスではないが、私は自分が知らないことを知っている。それを自覚した上で、感じられるものを大切にし、知ろうとすることが大事だと思う。これからも、世界を感じ、ひとつひとつ確かめながら描いていきたい。そして、不確かな世界とその中に確かに感じられる生命を画面上にも表現できたら幸いである。

スカラシップを通して

私は現在、主にアクリル絵具を使用して制作している。大学で学び始めて数年は油彩のみ、徐々にアクリル絵具との併用、といった期間を経て今に至る。それは、油彩での制作に問題があった訳ではなく、制作に掛る時間の調整や、絵具に求める表情の変化、制作環境の移り変わりなど、様々な要因からその時々「より良いかたち」を選択してきたのだ。今でも作品によっては油彩を選択することもある。

アクリル絵具との併用をやり始めた時期は、扱いに慣れず、望む表情をうまく引き出せないため、結果としてほぼ油彩で仕上げることも多々あった。しかし、回数を重ねていく中で自分が望むものに近づいていき、今ではメインの描画材として使用するようになった。そのように、ある程度の描く力と画材への理解があれば、どんな描画材でも、一定の効果は得られるものと考える。

しかし、それと同時に、物質性を伴う絵画制作である以上、描画材からの影響も必ず受ける。使用画材の変移を体験する中で、それぞれの描画材に「引っ張られる」感覚を実感してきた。それは、画面とのやりとりの中で望む筆致が変わるなど、「自身の何が引

expecting
アクリル絵具、キャンバス
（各）53.0×45.5㎝
2018年

き出されるかが変わる」ようなものである。

今回スカラシップを通して、油彩やアクリル絵具といった違いだけでなく、メーカーやその中での絵具の種類、色、メディウム、下地、筆など様々な画材・道具からも同様の影響があるのだと改めて実感した。今までと違うものを使うことによって生まれる誤差から、無意識にやってきたことを確認し、再構築する機会にもなる。失敗をすることでよりよいものを厳選することもあれば、選択肢が増えることもある。また、単純に十分な画材があり、いつでも手に取れる環境は、ゆとりを生み、無自覚にあった制約を取り払い、よりよい制作へ向かわせくれた。これらの貴重な経験を活かし、今後もよい相互作用を生みながら、柔軟に制作していきたいと思う。

drift
アクリル絵具、キャンバス
130.3×162.0㎝
2016年

新直子

1988年　鹿児島県生まれ

2011年　筑波大学 芸術専門学群美術専攻洋画コース 卒業
2013年　筑波大学大学院 人間総合科学研究科博士前期課程芸術専攻洋画領域 修了

個展
2019年　新直子展(タイトル未定)　アートコンプレックスセンター／東京　7月23日～7月28日まで開催予定
2018年　overflowing　アートコンプレックスセンター／東京
2017年　chain　日本橋三越本店 本館６階 アートスポット／東京
2016年　great flow　ギャラリイK／東京
2014年　grace　ギャラリイK／東京

グループ展他
2017年　ファインアート・ユニバーシアードU-35展　茨城県つくば美術館／茨城
第４回未来展　美大の競演　日動画廊／東京
肆軌　ACTアート大賞展2017優秀賞受賞者グループ展　アートコンプレックスセンター／東京
FACE展2017　東郷青児記念損保ジャパン日本興亜美術館／東京
ACTアート大賞展2017　アートコンプレックスセンター／東京
日本コラージュ・2017 Part3　ギャラリイK／東京（ ’14）
2016年　ワンダーシード2016　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京（ ’12）
2015年　pieces　ギャラリイK／東京
第５回Next Art展　朝日新聞東京本社本館コンコース、松屋銀座8階／東京
2012年　第５回利根山光人記念大賞展 トリエンナーレ・きたかみ　北上市市民交流プラザ等／岩手
2011年　第66回南日本美術展　黎明館、鹿児島市立美術館／鹿児島
2010年　日中芸術交流展　中国美術学院／[中華人民共和国]

受賞歴他
2018年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
三井ガーデンホテル五反田パブリックコレクション
2017年　ACTアート大賞展2017　優秀賞
FACE2017（損保ジャパン日本興亜美術賞）　審査員特別賞（審査員：堀元彰）・オーディエンス賞
2016年　ワンダーシード2016　入選（ ’12）
2015年　第５回 Next Art展　推薦
2012年　第５回利根山光人記念大賞展 トリエンナーレ・きたかみ　第一部門部門賞・買上
2011年　第66回南日本美術展　奨励賞
第９回熊谷守一大賞展　入選
2009年　第７回中札内村 北の大地ビエンナーレ　北の大地大賞・買上
2008年　第８回福知山市 佐藤太清賞公募美術展　特選

https://naokoshin.jimdofree.com/

寺脇さやか

TERAWAKI Sayaka

見えない存在があるという事

木炭やコンテの黒も好きだが、油彩なら紫が混色された色がいい。時々ピンクや黄色を小さく入れる。滲みを広げて部分的に線を曖昧にしたり、もったりとした白やグレーで全体を崩すことを繰り返すと、より洗練されたものが浮かび上がってくる。日常に垣間見える、目に見えない力、畏怖する感覚を確かめるように描いてきた。

山に入山するときの一歩。
鳥居をくぐる瞬間。
家の片隅や廊下、階段などにふとした時に感じる気配。
欲望を持ち、葛藤する心。
人間の生と死。

子供の頃、地元にある河口から大阪湾へと繋がる境の防波堤と海岸へ、何かするでもなくよく通った。うっかり長居すると夕方には潮が満ちてしまい海岸から堤防への入り口が波で覆われて出口が無くなってしまう。その時どうやって上がってきたのかハッキリと覚えておらず、出口が断たれる怖さだけが今も夢に見る程に覚えている。

私は生まれてすぐにカトリック教会で洗礼を受け、信仰を持って生きてきました。子供の頃から通っている教会の庭で植物の写生をすることが心地よく、それを作品に用いる事も多々ありました。室内へ入り休憩することもしばしばで、十字架の前に立つと

『今日も描かせてもらっています。こうこうこんな具合で美しく描けたので満足です。そういえば最近こんな事をしてしまいました。反省します。あと、こんなことがありました。』

という風に、対話する事が私にとって自然な事でした。目に見えないものを信仰する事と、自然から畏れを感じる事は根源的なところで同じものだと考えています。

島根県の山奥で、古く傾いた大きな木に、元の姿が見えなくなるほど蔦が覆いかぶさり、絡まりついたその異様な様を見た時、それが完全な姿であるかのような存在感を放ち、何か意思を示しているように感じられました。その体験から植物によって畏れを描く事に繋がりました。

日々の忙しない生活の中では、畏れや信仰などは簡単にかき消されてしまいますが、そういった存在に立ち返る事が出来、ずっと寄り添う事の出来る絵が描けることを願っています。

スカラシップを通して

日本画を専攻した後、現在は油彩と顔彩を用いて制作をしています。
行き詰まりを感じ、筆が止まった期間がありました。そんな時に油絵具での制作を勧められ、あっという間にその粘度と艶感、即興性に魅了されました。はじめはファッション感覚で好きな色の絵具数色とホワイトの感覚だけでの制作から始まりました。
そのような始め方でしたので、描画材の揃え方にも偏りがあり、少しのコンプレックスを抱えながらも自由に描いてきました。まだ知らない自分に適した一色を手に入れるには、店頭の色見本や成分表示だけでは分かりません。そしてスカラシップで材料を受給出来ることとなり、まずは端から端まで絵具を揃えたいという願いが叶いました。まだ全色を使い切れてはいませんし、特性も把握しきれていませんが、通常では選ばない色を一色パレットに出すだけで絵がいつもと違って進みだします。画材が潤う事で制作の幅が広がったので、アイデアを書きとめ、一つ一つ丁寧に完成させていきたいと思います。

連れ去られる記憶
油絵具、キャンバス
14.0×18.0cm
2019年

太陽のかげ
油絵具、キャンバス
145.5×145.5㎝
2016年
photo by Oギャラリーeyes

寺脇さやか

1984年　大阪府生まれ
2007年　成安造形大学 造形美術科日本画クラス 卒業
2009年　京都市立芸術大学大学院 美術研究科修士課程日本画専攻 修了

個展
2016年　Oギャラリーeyes／大阪 ('10 - '16年まで毎年)

グループ展
2019年　京都 日本画新展2019　美術館「えき」KYOTO
　　京都 日本画新展 特別展覧会@二条城　世界遺産 二条城 台所／京都
2018年　続 京都 日本画新展 ×ギャラリーカフェ京都茶寮　ギャラリーカフェ京都茶寮／京都
　　ART MEETS WINTER　月ヶ瀬堺町店／京都
　　Backbone of faith展　Oギャラリーeyes／大阪
2017年　京都府新鋭選抜展2017-Kyoto Art for Tomorrow-　京都文化博物館／京都
　　DOJIMA RIVER AWARDS 2017 -NUDE-　堂島リバーフォーラム／大阪
　　トゥールビヨン14　Oギャラリーeyes／大阪 ('16)
2016年　LAKECURRENT-湖派展　堀川御池ギャラリー／京都
　　今 -toki-展　ギャラリーマロニエ／京都
2015年　華やぎ展　SYRTEMA GALALLERY／大阪
　　outside and the inside Ⅳ　Oギャラリーeyes／大阪
　　第4回京都日本画新展　美術館「えき」KYOTO／京都 ('12、'14)
2014年　成安日本画卒業生展　成安造形大学内ギャラリー／滋賀
　　The 9th 100 Artists Exhibition　Ouchi Gallery／ニューヨーク [アメリカ]
2013年　Semanticportrait展　Oギャラリーeyes／大阪
2012年　京都芸大日本画の現在　ArtSpace-MEISEI／京都
2011年　les signes　Oギャラリーeyes／大阪

ハタユキコ

HATA Yukiko

深刻で滑稽な絵

私は物心ついた頃から社会に対して強い「違和感」を感じていました。幼稚園から女子のグループ化や友達付き合いに悩み、小学校ではおはようの挨拶がどうしても言えず、学級会議に掛けられたこともあります。周りが普通にしていることが欺瞞的で社交辞令のように思え、モノをあげる事や声を掛ける事が難しくなり日常で心が擦り切れていました。

そんな高校生のある日、「自分の目を通した世界」を描く事で客観視して現実を受け止められることに気付き、絵を描くことを始めました。しかし最初はすべてに黒を混ぜた暗い色で暗いテーマの絵を描いていた為、誰もが直視したくない汚らしいものになってしまい共感してくれる少数の人を除き、多くの人の足を止めることは出来ませんでした。悩んでいた大学三年の春、政治学の講義で「キューバ危機」のビデオを観て衝撃を受けました。いつアメリカと核戦争が始まるかも分からない危機的状況の中、追い詰められたキューバの人達はまるでお祭りを楽しむかのように明るかったのです。いつ絶えるかも分からない生命の火が最後に熱く燃え上がるようなその姿を見て、人間の根源的な強さと美しさを感じました。現実の様々な問題を描くには、「核爆弾が破裂する一瞬前の世界がとても明るく輝く様に」毒々しいまでに明るい色がふさわしいと思う様になりました。

私の絵の中で描かれるモチーフは通った小学校のプールや近所の公園の黄色いベンチ、今まさに絵を描いているアトリエの和室と身の回りにある日常の風景です。それら誰もが見覚えがあり親しみが持てるモチーフと、テレビの中で実感も無く虚構の様に描かれる世界で日々起こる様々な事件や出来事を同列に描くことで、二つの反する世界の出来事は同時に起こっているという事。ミサイルがもし今日落ちてくるのだとしても、通常通り出社や登校をしなければならないどうしようもない私達の現実を描いています。

作品テーマは戦争、過労死、いじめ自殺など、現代の世相を反映して暗いテーマが多いですが、ただ救いが無い絵なのではなく、希望と、笑えない様な世の中であるからこそ思わずくすっと笑ってしまうようなおかしみを持たせて描いています。

今、この瞬間に生きているからこそ描ける絵を描いて、同時代を生きる人に見て欲しい。時代の空気を描き遺したいと思い、自分の目から見た社会を描き続けています。

その世界は隔絶しているからこそ滑稽で、涙が出るほど美しいと思う。

スカラシップを通して

私の制作では、自然界には無い合成着色料の様な派手な色が現実との乖離を示し、作品のテーマを表す重要な要素の一つになっています。その為、色の鮮度には特に気を付けて制作しています。色を濁らずに美しく保つためにはなるべく混色しない方が良いため、黄色一つとっても何色もの色を必要としますが、これまでは制作費の都合上そこまで色に資金をかける事が出来ませんでした。その為今回支給のほとんどを油絵具に充てました。

絵具を頂いて驚いたのは、今まで使っていたヒュー、チントと本物の色が全く違った事です。特に制作によく使っていたセルリアンブルーですが、ヒューを今まで使っていた為、今回初めて本物の「セルリアンブルー」を使ってみてその色の余りの違いにとても驚きました。また自分では思いつかなかった様な色を何色も試すことが出来ました。それが何故今まで使わなかったのか悔やむ位、チューブから出した瞬間拍手を送りたくなるような美しい色であったりして、これまでより豊富な選択の中で制作する事ができました。ヴェルネや油一といった他の作家からよく名前を聞いてはいても、自分とは一

悲しみを流す
油彩、綿布、パネル
41.0×53.0㎝
2019年

生縁が無いだろうと思っていた高級絵具に触れられたことも貴重な経験になりました。

また私はエスキースを最初に決めて制作していても、制作途中で何度も塗りつぶして描き直すため絵具の消費量が多く、大きい絵であればある程多くの絵具代が掛かっていました。スカラシップを受給させて頂く前だったら断らざるを得ない様な大作制作の依頼も、迷わずに挑戦する事が出来て本当にありがたく思いました。

スカラシップで頂いた大量の絵具を使い、これを糧に飛躍していける様、これからも制作活動に精進したいと思います。

祝言
油彩、キャンバス
130.0×162.0㎝
2015年

ハタユキコ

1988年　宮城県出身

2011年　東北芸術工科大学 芸術学部美術科洋画コース 卒業
2014年　東北芸術工科大学大学院 芸術文化専攻洋画研究領域 修了

個展
2019年　靖山画廊／東京（銀座）にて9月24日～10月5日迄開催予定
2017年　ハタユキコ展 夏の幻視　若手アーティスト支援プログラム Voyage　塩竈市杉村惇美術館／宮城
2014年　擬態する絵画　GALLERY b.TOKYO／東京

グループ展
2019年　Reimagined: Contemporary Artists Take on A Tale of Genji　SEIZAN Gallery New York[アメリカ]
2018年　みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2018　東北芸術工科大学／山形
2017年　第11回西脇市サムホール大賞展　西脇市岡之山美術館／兵庫
2016年　現在戦争画展　TAV GALLERY／東京
2015年　TERRADA ART AWARD 2015　T-Art Gallery／東京
ART AWARD NEXT Ⅲ東京美術倶楽部　東美ミュージアム3・4階／東京
2014年　LITTLEAKIHABARA MARKET-日本的イコノロジーの復興 -　六本木ヒルズ A／DGALLERY／東京
第一回 CAF賞　TABLOID GALLERY／東京

受賞歴
2017年　第32回ホルベイン・スカラシップ奨学生
第11回西脇市サムホール大賞展　山下裕二賞
2015年　TERRADA ART AWARD 2015　入選
ART AWARD NEXT　Ⅲ　入選
2014年　第一回 CAF賞　入選

パブリックコレクション　西脇市岡之山美術館／兵庫

http://hatahatayukiko.wixsite.com/human-complex

日淺優

HIASA Masaru

ホルベインスカラシップレポート

画材について

以前はキャンバスに描いていたのですが、パステルを使うようになってからは、パネルに変えました。書道用品店で見つけた周桑和紙（愛媛県東予の伝統工芸品）を見つけました。丈夫でありながら薄く、紙の繊維がほとんど見えない紙です。パステルを使い、薄い絵具を染み込ませて描く方法と徐々に馴染んできているところです。パステルを使うのは、1つ目は線描画で風景や人をスケッチする習慣があり、その線を本作品に使いたいと思うこと。2つ目に普段子どもと関わり、絵を指導する機会が多い仕事をしていることもあり、パステルを使うことで自分自身も少し心が解放される気がしました。

木の板に直接描くこともあります。どちらにしても重ねすぎると絵具自体の質感が前面に出てしまうので注意しています。支持体の素材自体には自然を感じられる面白さがあるので、自分の作品ではそれを生かせられないと完成しにくいです。

絵画空間について

作品の初めの段階で色合いを決めます。色面にもう一色パステルで透かすように重ねたり、横に他の色を並べたりするのを造形遊びに近い感覚で楽しみながら描きます。素材感を残し、できるだけすべてを痕跡として残しながら行います。色彩に素早いタッチの線を入れることと、筆致を残すことによってドローイングのような躍動感を生かし、バチックというクレヨンを弾かせる技法で、絵具が弾かれた現象を残すことで躍動的な色を表現できるのではないか試行錯誤しています。色だけで描かれる空間の豊かさが面白くて抽象画を描いていますが、絵の中の形や構成に確信を持たせているものは主に音楽です。展示会場では演奏会もしばしば開催させていただいています。逆に展示された絵からイメージして即興演奏等をしていただくこと、空間に合った曲を演奏していただくことで、また新しい芸術の面白さに気付くことができます。

また、音楽と強い関係性のある画家が好きで、特にアンリ・マティスやパウル・クレーの画集や書籍は、憧れとして部屋の目立つところに置いて大切にしています。

色について

音をイメージしたり、絵から音をイメージしたりするという両方のプロセスを通して、新しくも、調和した色彩空間を作りたいと思っています。しかし、それだけでなく、制作していると普段の景色や自然が新しく見えたり、気付かない色が印象的に感じたりすることもあると思います。反対に、木漏れ日や木の葉、空、海の色など実際に目にした色を絵に取り入れます。そのような絵画とのやり取りの中で、自然と作品とが関連付いていきます。飛躍しますが、楽器も作る国や時期によって音が変わるように、生活している地域の気候や風土、現在の自分の環境は特に色によって強く絵に表れるものだと思います。瀬戸内の日差しをそのまま描くということではなく、自ずと表現されているということに意味があると感じます。海外の絵画や他の文化も好きですが、自分にとって制作するということは日常をどうするかということに強く関係することです。

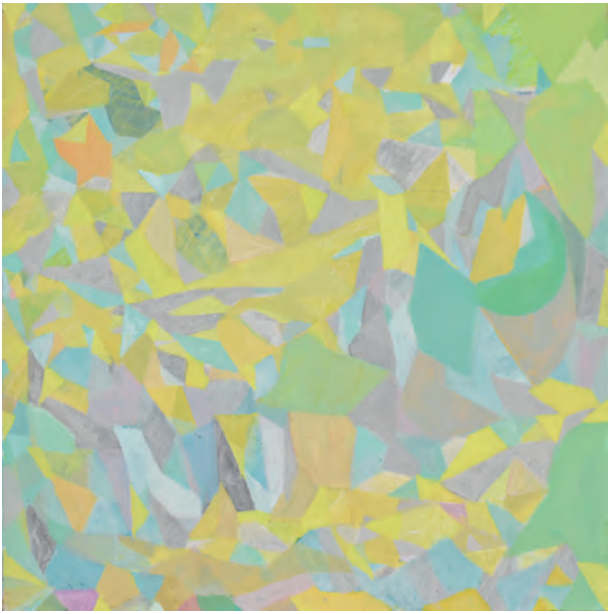
スカラシップを通して

奨学生に認定していただき、今現在の自分の制作や考えを振り返ることができたことは非常に嬉しいことでした。また、百数種類のアクリル絵具の初めて聞くような名前の色を試すことができたことはとても有意義でした。作品一つに必要な色も限定できるようになったり、混色にしても微妙な変化を見ることができたりするようになった気がします。

また、普段使用することのない水彩絵具や、大変高性能な水彩紙も試すことができました。水の配分に慣れず、紙の繊維を生かした表現など、違う表現に取り組むことは非常に難しかったのですが、持ち運びが可能な水彩絵具で、描きたい場所で風景を描いたり、スケッチを描いたりすることで、新鮮な気持ちで制作することができ、ストックができたことでスケッチと制作だけでなく、絵本などの制作も試行錯誤する自由もいただきました。今後とも展覧会をはじめ、発表をすることの上での一つの自信にします。ありがとうございました。

Sound of rain falling the night
パステル、アクリル絵具、和紙、パネル
80.0×80.0㎝
2018年

Birds Suddenly Appeared
パステル、アクリル絵具、和紙、パネル
80.0×80.0㎝
2016年



日淺優

1982年　愛媛県生まれ

2005年　神戸大学 発達科学部人間行動表現学科造形表現論コース 卒業
2011年　神戸大学大学院 人間発達環境学研究科人間表現専攻コミュニティアートコース 修了

個展
2017年　GALARIE une fille／愛媛
2014年　GALARIE une fille／愛媛
　　GALLERY301／兵庫
2013年　GALLERY301／兵庫
　　GALARIE une fille／愛媛
2012年　画廊宮坂／東京
2011年　GALLERY301／兵庫
2010年　GALLERY301／兵庫
　　海岸通りギャラリーCASO／大阪
2005年　EMPORARY　GARELLY／兵庫

グループ展
2016年　CROSS展　今治河野記念美術館／愛媛('14)
2014年　ART OSAKA2014　ホテルグランヴィア大阪／大阪
2013年　アーツエイド東北チャリティー絵画展CHAIN OF ART　ギャラリー島田／兵庫
2014年　Anniversary Group Exhibition　GALLERY301／兵庫('10、'11、'13)

受賞歴他
2012年　第７回月のアート展　けいはんな記念公園／京都
2011年　京展2011　京都市立美術館／京都
　　第50回北陸中日美術展入選　金沢21世紀美術館／石川
2009年　兵庫県展　兵庫県芸術文化協会賞　兵庫県立美術館／兵庫
2005年　第２回若狭おばま　命のかたち展　福井県立図書情報センター／福井

久松知子

HISAMATSU Tomoko

小さな物語を描く：制作の経緯に関するノート

二〇一七年からはじめた《小さな物語を描く》というシリーズは、作者自身のi Phoneの画像フォルダに保存されたスナップ写真から題材を選択し、その写真を描いています。個人的に気に入っている写真を選択し、その画像データを絵画として描きなおして、残しておきたいというものです。スナップ写真は小さな物語の断片です。小さな物語の断片を収集していくようなこの作品群は、大半に人物が描かれています。それは、わたしが出会った人であり、無名の人びとであり、誰かの知り合いです。

ここに描かれる小さな物語は、ある日の飲み会の一場面などであり、限られた人びとにしか出来事や人間関係の文脈は共有されないような局所的なものです。このような個人的な主題を描こうとすることは、わたしにとってはこれまでの自分の制作やひとつの歴史観のすりこみへの自己批判とともにあるものです。

それまでの自身の制作では美術史上（特に日本の近現代）の人物やその歴史観を主な主題としていました。そこでは絵画の登場人物や画中画に関する知識などが、作品鑑賞を成立させる条件のひとつとなっていました。そこでも、個人的な小さな物語と同じように、限られた文脈を描いた作品であることには変わりありません。しかし、私自身が日本の近代美術史を大局的な歴史観つまり「大きな物語」として捉えることに主観的にとらわれており、それについての歴史画を描かなければならないと考えていました。振り返ると、ひとつの史観によりかかりすぎる歴史への認知バイアスが、自分自身の芸術や歴史の捉え方を狭めていった面があったのかもしれない。膨大に細分化した文脈が存在する現代で、ひとつの歴史観を大きな物語として素朴に受け止め、なにかをつくることはできません。

二〇一八年の夏、大原美術館のアーティスト・イン・レジデンスプログラム「ARKO」では、岡山県倉敷市で滞在制作をしました。大原美術館は日本で最も古い近代美術館のひとつとも言われ、その成立の歴史もこの美術館にとって重要な物語となっています。私はアプリケーションの段階で、美術館についての歴史画を描きたいというプランを提出していましたが、先のような考えの変遷もあり、テクストの絵解きとしての歴史画を描くことをいかに脱するかがこの時の制作上の課題となりました。《物語との距離（２０１８、夏、倉敷》はここで描いたもので、アトリエビューのなかに歴史画が置かれた入れ子状の構成を構想しました。

この社会に実は根強く存在するモダンな歴史の捉え方に対して、作品ひとつで払拭できるものではないですが、今日の世界のとらえかたのひとつを絵画で提示したいと考えています。

スカラシップを通して

絵の描き方という点で1年前と今を比べてみると、それは大幅に変化しています。

スカラシップで受給したアクリリックブラシとフィルバート型のリセーブル筆を使い始めたことが、特に大きな影響があります。以前は日本画用の水含みの必要な柔らかい毛を主に使い、絵具は水を加え使用し、小刻みに描き込むような表現をしていましたが、筆を変えたことで、タッチや絵具の粘り気を生かした表現や色の鮮やかさに気を配るようになりました。以前の表現も自分の独自性のある描きかたになっていたとも思いますが、新たな制作テーマへの発展と合わせてその表現も明るく伸びやかなものを自分が求めていたところにとてもマッチした筆と出会うことができました。スカラシップを通して、これまで試すことのなかった画材との偶然の出会いがあったこと、またリピートしていつも使っている絵具類を潤沢に使えたことは、制作活動をより実り多くする導きとなりました。

小さな物語を描く
アクリル絵具、キャンバス
60.6×72.7㎝
2018年

〈美術〉の神様
岩絵具、インクジェットプリント コラージュ
アクリル絵具、キャンバス
230.0×180.0㎝
2017年

久松知子

1991年　三重県生まれ

2014年　東北芸術工科大学 芸術学部美術科日本画コース 卒業
2017年　東北芸術工科大学大学院 修士課程芸術工学研究科芸術文化専攻日本画研究領域 修了
2019年　東北芸術工科大学大学院 博士課程 中途退学

個展
2019年　久松知子 絵画展　日本橋三越本店／東京
2018年　小さな物語を描く　ギャラリーMOS／三重
ARKO2018 久松知子　大原美術館／岡山
2017年　ひさまつ子の思い出アルバム painting　トライギャラリーおちゃのみず／東京
2015年　美術家の幸福論！　Roppongi Hills A/D gallery／東京
2014年　喜多方酒樽絵画 etc.　新宿眼科画廊／東京

グループ展
2018年　えらぶん：のこすん：つなげるん　はじまりの美術館／福島
マルチシャッター/Multi shutter　EUKARYOTE／東京
山形ビエンナーレ　東北芸術工科大学（'18）、文翔館（'16）／山形
山形藝術界隈展〇七　石巻のキワマリ荘／宮城
2017年　バープルーム大学　尖端から末端のファンタジア　ギャラリー鳥たちの家／鳥取
TOHOKU CALLING　アーツ千代田 3331／東京、東北芸術工科大学／山形
2016年　NIHON画～新たな地平を求めて　豊橋市美術博物館／愛知
2015年　東北画は可能か？―地方之国構想博物館―　東京都美術館／東京〔共同キュレーションで参加〕

受賞歴他
2018年　アーティストインレジデンス　大原美術館　ARKO2018／岡山
2015年　第７回絹谷幸二賞　奨励賞
第18回岡本太郎現代芸術賞　岡本敏子賞
2014年　公益財団法人佐藤国際文化育英財団 平成26年度　第24期奨学生
2013年　アーティストインレジデンス　喜多方・夢・アートプロジェクト2013喜多方アート暮らし／福島

tomokohisamatsujp.wordpress.com

福田絵理

FUKUDA Eri

絵を描くこと

良く見えない世界を描く。思いを描く。ネガティブとポジティブ、もしくは、現実と嘘の同居を描く。作品について何を描いているのかと聞かれたらこの様に答えられます。

「あなたは作品で何を表現しているのですか?」という質問はよく聞かれますが、「自分が表現したい事」については確かに存在しています。しかし、作品より先に、簡単に○○ですと言えるものではありません。それはとても不鮮明でなんとか掴み取ろうと試みますが、何年もかけてやっと少し理解出来る程度に留まります。逆を言えば、明確に出来ないために作品として具現化しているとも言えます。ですので、このように絵ではなく言葉で作品について述べるのは勇気と気遣い、慎重さが必要です。

私は作品の中に、穴の空いた箱上の空間、よくわからない抽象的な塊、具体的に抽象化された塊がモチーフとしてよく登場しますが、これらは現実世界の形から着想されています。例えば、窓、人、壁、部屋などです。技法としてはシルバーホワイトをメインに混色した絵具を塗り重ねながら描いていきます。輪郭は一度明確にしたのち、ぼかす作業を繰り返します。この描き方をする理由としては対象を周りの空気とともに描くためです。また塗り重ねる事で得られる、マチエール、絵具の透明感、私の手垢のような痕跡が必要であると感じているからです。

作品の出来上がりは、ぱっと思い着く事が多いです。それは、歩いている時が多いですが、制作中、または、誰かと話している時などに唐突に訪れます。それを、まずラフにメモに描き留め、その後ドローイングを経てタブローにしていきます。展覧会などの都合で考え抜いて、ひねり出したアイディアは最終的に納得出来ない作品になる事が多いです。しかし、なぜかふと出てきたアイディアは良い作品になる事が多いです。ふと思い着いて制作され、良く出来たと思う作品は「自分の表現したい事」がうまく形になったものになります。しかし、それがなぜうまくいったと思うのか、なぜ良く出来たと思うのか、描き終えて少し時間が経ってから理解できます。理解できたと言っても完全にではありません。

制作の動機の原点は、嫌な、ままならない現実から逃れる事でした。一人、部屋の中で、現実を思い返し、また、現実では起こりえない素敵な出来事を思い描く、この時間が作品として形になっていきます。ですので、私の作品はネガティブとポジティブ、嘘と本当が同居していて、時折、支離滅裂なことが起こり、私にも理解できない部分があるのだと思っています。

表現と素材

奨学生の始まりの頃から終わりにかけて、展覧会へ向けての制作がありました。今までにないハイペースで作品を描いたので、必要になる画材も多く、今回のスカラシップは大変助かりました。

この頃、「下地について」と「絵筆について」もっと適した素材や技法はないかと研究をしていました。それまで、下地は自分で作ったものを使用していましたが、奨学生の間は、ジェッソなどを試しながら、下地の研究を行いました。その中で発見した、絵具を使用した下地は一番手応えと可能性を感じています。

また絵筆についてはそれまで柔らかい筆を多用していましたが、絵具ののりが豚毛に比べて悪く、仕上げまで時間がかかっていました。豚毛を使用した絵肌は数年前から試していましたが、ホルベインの筆は弾力が良いため使いやすく、頻繁に使用していました。すると柔らかい筆を使用していた時に比べ、絵具の層が厚くなっていきました。この下地と表層に関しての新たな手法は1つの良い効果をもたらし、私の制作が一歩進みました。

この効果に関しては下地によるものも大きいですが、下地と表層の絵具を少し変えた

食卓の上の門のある家
油絵具、キャンバス
112.0×145.5㎝
2018年

だけで、ここまで違いがでるのかと、改めて素材と表現の関係性を認識し、まだ触れていない様々な可能性があると改めて思いました。今後とも、画材の研究も行いながら、制作を進めて参りたいと思います。

切れ目のある穴、射す光
油絵具、キャンバス
27.5×45.7㎝
2017年

福田絵理

1988年　東京生まれ

2013年　武蔵野美術大学 造形学部油画学科油絵専攻 卒業
2015年　武蔵野美術大学大学院 造形研究科美術専攻油絵コース 修了

個展
2018年　その世界に触れたとき、それゆえ、　トーキョーアーツアンドスペース本郷／東京
2016年　そこ、　櫻木画廊／東京
2014年　見られたような世界　櫻木画廊／東京

グループ展
2019年　夜のしじま　櫻木画廊／東京
2018年　８月の夢　アトリエどろっぷ／埼玉
　ワンダーシード2018　トーキョーアーツアンドスペース本郷／東京
2017年　BankART Life V　観光　BankART Studio NYK／神奈川
　群馬青年ビエンナーレ2017　群馬県立近代美術館／群馬
2016年　FACE2016損保ジャパン日本興亜美術賞展　損保ジャパン日本興亜美術館／東京
　ワンダーシード2016　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
2015年　トーキョーワンダーウォール公募2015入選作品展　東京都現代美術館／東京
2014年　佐藤国際文化育英財団第23回奨学生美術展　佐藤美術館／東京
2013年　シェル美術賞2013　国立新美術館／東京
　理化学研究所展示プロジェクト　独立行政法人理化学研究所／神奈川
　アートアワードトーキョー丸の内2013　行幸地下ギャラリー／東京
2012年　風景の気配　新宿眼科画廊／東京
2011年　あそび　Gallery LE DECO／東京
2010年　いない　いない　GO!　相模原市民ギャラリー／神奈川

受賞歴他
2017年　第32回ホルベイン･スカラシップ奨学生
2015年　武蔵野美術大学卒業･修了制作展2015　研究室賞
2014年　武蔵野美術大学大学院博士前期課程奨励奨学金
　神山財団芸術支援プログラム
2013年　佐藤国際文化育英財団
2012年　武蔵野美術大学校友奨学金

https://erifukuda.wixsite.com/artworks

福本健一郎

FUKUMOTO Kenichiro

あめつちのかけら

現代において、「ものを作ること」の意義を問いながら絵画と彫刻を制作しています。二〇一一年の東北大震災をきっかけに自然と人との関わりに興味を持ち、その後二〇一三年から、シンガポールを拠点に東南アジアを旅し、各地の文化をリサーチしながら制作を行ってきました。東南アジアでは原生林に入り、倒れた大木から新たな植物が生える生命力、太古から続く自然界の生と死の循環を目の当たりにしました。それ以来、植物や木、石などの自然物を見るたびに自分が葉っぱや石の一部のように感じられ、それらに自分自身を重ねるような感覚を持ちながら制作しています。また、旅をしながら出会った工芸品、民芸品の人形などから着想を得て、人類が古くから行ってきたものづくりについても思いを馳せながら、絵画と彫刻における造形の可能性を模索しています。

現在は、沖縄での展覧会に向けて、木彫とセラミックの彫刻をメインに制作しています。展覧会の会場である沖縄の《やんばる》という場所は、熱帯の植物や奇岩、海などの自然が広がるところです。それらの景色と呼応するように、今までの木彫に流木や砂などの自然物を取り入れ、天地（あめつち）のかけらをイメージした作品を制作中です。自分自身を含めたあらゆる生物は、宇宙に浮遊する大きな隕石同士が衝突し、小石になったかけらのように自然界の一部であり、繋がり合っているものだと思っています。また、生命が生きていくためにも欠かすことのできない海から蒸発した水は大気中で雲になり、やがて雨となって大地に降り注ぎます。そんな循環の中にある大地、空、海、そして木や土、それらすべてが、新たな命を生み出す一つの家族であるようなイメージを持っています。記憶に残った植物や生物などのイメージを、異なる植物同士を繋いで一つの植物として育てる方法である「接ぎ木」のような感覚で自由に組み合わせています。まだ見ぬ宇宙の生命体や生物を夢想しながら、新たな天地（あめつち）のかけらを生み出すような気持ちで制作を行っています。

スカラシップを通して

この一年間は、スカラシップをいただいたことで、絵画や彫刻の制作と並行して、これまで使用したことのない色や画材の研究を行うことが出来ました。多くのアクリル絵具と油絵具を一度に頂いたので、整理するためにカラーチャートを作り、体系的に把握した上で、感覚的に使えるようになるまで、ある種の訓練のような作業を繰り返し行いました。以前は、新色を手に入れると、ただ感覚的に使っていたところがありましたが、チャート作りを通して、少しずつではありますが、以前よりも的確に使いたい色をコントロールして、使えるようになったと感じています。また、この一年間は、絵画だけでなく、木彫にアクリル絵具で着彩することにも積極的に取り組みました。木に色を付ける場合、予めある程度、出来上がりをイメージ出来ていないと、やり直すには、木を削らなければならなくなります。アイデアを絞り、配色を決める時に、自分で作ったカラーチャートは、とても有効でした。彫刻では、木と土の素材感を出したかったので、極粗粒子のモデリングペーストなどを使用することも試み、木彫の表現の幅が広がりました。こうした新しい素材を試みる

あめつちのかけら#36
アクリル絵具、木、流木
49.4×7.4×10.5㎝
2018年

ことが出来たのも、スカラシップのおかげです。

今まで費用的な面で躊躇し、なかなか試すことの出来なかった画材や、製品カタログを見て初めて知った画材などを手に入れ、実際に試すことができたことからは、多くの収穫があり、今後の表現に活用できそうな新しい着想も得ることができました。画材を実際に触りながら、失敗も含めて、自分自身で試行錯誤することの重要さにも改めて気が付かされました。画材費などの経済的な負担が減ったことで、思い切って絵具を使うことが出来、また、精神的にも落ち着いて制作に集中することが出来ました。このような機会を頂けたことにとても感謝しています。

Into the starry sky#2
アクリル絵具、銀箔、木
35.0×8.3×8.1㎝
2017年

福本健一郎

1986年　広島県生まれ

最終学歴
2011年　東京藝術大学 美術学部絵画科油画専攻 卒業
2014年　東京藝術大学大学院 美術研究科油画研究領域 修了

個展
2017年　List Satheby’s featured by Kenichiro Fukumoto　リストサザビーズ／東京
2015年　トーキョーワンダーサイトエマージング　トーキョーワンダーサイト渋谷／東京
　　トーキョーワンダーウォール　東京都庁第一本庁舎３F南側空中歩廊／東京
2014年　Dear Friends　JIKKA／東京
2013年　KIZUKI+LIM／［シンガポール］

グループ展
2019年　やんばるアートフェスティバル　沖縄本島北部地域 大宜味村旧塩屋小学校／沖縄(’18)
2017年　Scenary Poem by Kenichiro Fukumoto x Stephen Wong Chun Hei　PROJECT FULFILL ART SPACE／台北［台湾］
　　After images…　iPreciation／［シンガポール］
2014年　アートアワードトーキョー丸の内2014　行幸地下ギャラリー／東京
2013年　Cross Encounter: A collaboration of Artists from Singapore and Japan　ジャパンクリエイティブセンター／［シンガポール］
2010年　BRUTUS x Hidari Zingaro　Hidari Zingaro／東京
　　現役美大生の現代美術展 Produced by X氏　Kaikai KiKi gallery／東京

受賞歴他
2014年　アートアワードトーキョー丸の内2014　今村有策賞
　　トーキョーワンダーウォール賞
2016年　アーティストインレジデンス　NA Art House／ジャカルタ［インドネシア］
　　アーティストインレジデンス　KUNCH／ジョグジャカルタ［インドネシア］

www.kenichirofukumoto.com

森島里香

MORISHIMA Satoka

不完全な編集

人間は編集する生き物である。人の頭の中はいい加減で日常の記憶や経験、不具合で混ぜこぜになっている。毎日、その混ぜこぜの頭の中から自身の情報を外部に引っ張り出している。私たちはイメージを継ぎ接ぎした世界の中で生きている。継ぎ接ぎはというと、無意味で無責任で無作為に非日常的なことである。

「僕たちの意味する非日常とは非日常的なことではなく、非日常的なことでなく日常の中で見落とされていてしまった些細なこと。」A LIGHT UN LIGHT – ANREALAGE

日常の中の見落とされている些細なことを無意味で不具合によって切り取られたものが重なってオートマティズムしているものをテーマとしている。一番身近なものでいうと夢の世界である。ありえない夢であっても一つ一つ紐解いて行くと私自身が経験したものの積み重ねである。

主に私は、雑誌やネットから画像の切り抜きを使ってコラージュをして制作している。SNSで大量の画像情報を見慣れている私たちにとって重要なことは、違和感ということではないか。少し不思議で不完全なのが魅力的に思う。デジタルを見慣れている私たちにとってアナログ写真の色褪せや、ブレなど失敗しているのかもしれない状態が気になる。

私の作品は、本を使って制作することが多い。既成の本の上から書かれている文字を連想させ、写真を貼り、絵の具でドローイングをする。既成の物を解体し、また新しい形を変化させる。例えば、本を解体し、大きな本を作るなど。それは、不完全なものであり、完全にはデジタル化できない手作業の感覚的であり、不具合から起こるものを追求したい。

シンガポールのクリエイティブディレクターのテセウス・チャンが中心となり発行している『WERK』という雑誌を見た時にはすごく驚いた。彼の雑誌作りに対しての何でも複製できる時代だからこそ、これまでに見たことのない雑誌を挑戦的に作り続けている。自由な発想でたくさんの方法で雑誌に変換させており、中でも手触りなどの人間の感覚を刺激する方法は、誰もが持っている子ども心をくすぐる。彼も不完全の美を意識しており、欠陥などの不具合な不完全さこそがコンセプトである。完全にデジタル化されない、アナログの美しさを提言するような作品が魅力的であると感じる。

平面の作品でもコラージュの感覚的な作業とレイヤーで重なる絵具の物質感を用いている。印刷物やデジタルでは、表現できないものを目指している。ネットから切り取った写真を使っている。上からに絵具を塗り重ねながら、どのような動きをするかを動画として想像し、動きを絵具の筆のストロークや紙を曲げてみる。そうすることで日常の一瞬の切り取りとなる。それは見落とされた非日常であるかもと私は思う。

私は、そんな些細な日常を切り取り、編集しながら制作を続けていく。

スカラシップを通して

素材の使い方、表現方法を知っていくことは、たくさんの素材を使って試行錯誤して、使っていかないといけない。スカラシップを受けて、多様な素材を試すことで、幅広い表現を知ることができた。今回のきっかけで出会うことができなかった画材もたくさんある。普段、手にすることがない画材も手に入れることができ、可能性が広がっていった。

その中でも特にアクリリックインクは、私の作品作りにとってすごく使い易い絵具だと思った。通常のアクリル絵具のように水を溶かずにそのまま使うことができる。専用のマーカー容器はインクを入れてペンのように使い、自由自在に描くことができる。シャープな線、ベタ塗りや力強いドローイング、グラフィティーワークなども便利である。また、メディウムと混ぜて滲みや盛り上げの表現もできる。あと、アクリリックカラーフルイド、アクリリックカラーヘビーボディとアクリラガッシュをそれぞれの表現方法によって使いわけできるのが、楽しい。それぞれの色数も豊富で発色も綺麗である。

私の描き方は、特に下書きはなく、素材の組み合わせでレイヤーが重なることに表情

At the window
アクリル絵具、キャンバス、パネル
45.5×38.0㎝
2019年

を変えながら構成していく。本にドローイングしていく時には、アクリラガッシュ、アクリリックカラーを使うことが多く、一枚一枚の塗り方、線の緩急や色の調合を工夫している。また、アクリリックインクのスーパーオペークホワイトは、白の種類の中でも濃淡がつけるのが面白い表現になり、私にとってとても重要な色であると気づいた。

今は自分のものにできる表現を習得している段階であるが、絵具とメディウムを混ぜることによって素材の質感の変化や流動的な表現、自由な展開を挑戦していきたいと思う。

artifical flowers
アクリル絵具、キャンバス、パネル
45.5×38.0㎝
2017年

森島里香

1991年　兵庫県生まれ

2014年　京都造形芸術大学 芸術学部情報デザイン学科 卒業
2016年　京都造形芸術大学大学院 修了過程芸術表現専攻 修了

グループ展
2017年　オープンスタジオ　atelier &／大阪
echo of echoes展　西武渋谷／東京
2016年　京都造形芸術大学大学院卒業展・修了展　京都造形芸術大学大学内／京都
京都造形芸術大学×國立台北芸術大学交流展　國立台北芸術大学内／台北［台湾］
2015年　二人展　:Z　take two ギャラリー／京都
OLD YOUNG　タンバリンキャラリー／東京

廖震平

LIAO Zenping

日常練習

僕は実際に経験した風景を元にして絵を描きます。

製作過程について、まず日常生活や旅行中で風景を写真に撮り、選別します。画面構成とキャンバスの大きさなどを考えてデータを多少加工し、それからタブレットに読み込んで加工した画像を見ながら、ただ写経のように描き始めます。内容は大体人がいない公園の片隅や植林、川沿いの橋柱、電車の中から見た一瞬の風景、人工物と混ぜている海や山の景観など、特に綺麗な景色ではありません。

映画の中に主人公を映していないただ樹木とか、青空とかのシーンもありますね。一見物語りとの関係性が見だせないが、ストーリーのリアル感には、それらの「背景」や「空白」が欠かせません。恐らく僕たちの人生において一番よく見た物は、このような無意味な景色でしょう。

僕がやりたいことは、このような目の前にあっても見ていないような景色を、もう一度絵画の方法を通して、観客と一緒に見つめることです。とりわけ矩形の画面を意識して水平・垂直線を多用したり、画面を縦横に分割したり、画面の内側にもうひとつの矩形を描いたり、軸線を意識することで、具象のように見える画面自体が、作品に物質的感覚を与えるようにします。こうして、風景のイリュージョンと形式上の抽象性を同時に表出させ、観客自身の感覚と記憶を揺さぶる試みです。

僕にとっての絵画は日常の練習みたいです。集中力の練習、日常で出会った景色の見方の練習、具象と抽象とを並立する練習。こういう一回一回の練習／復習を重ねて行くと、いろいろ気付かなかったことや忘れていく経験や記憶に、少しでも近づいていくような気がします。

たとえ平穏な日常生活を過ごしていても、時々いろいろな心配と不安に襲われます。こういった理由もない突然の情緒に対して、もし身近な偶然に出逢った様々な風景との対話ができれば、癒されることもできるじゃないかと、いつも思っています。もしかしたら、僕は絵画を通して、自分なりの信仰を見つけることを試しているかもしれません。

スカラシップを通して

僕の描き方は、出来る限り対象の色を忠実再現する試みです。おもに油絵具で、幾つかの色を混ぜて、理想的な色を作り上げるまで、結構時間をかけます。この際、絵具の質が大きな影響を与えます。今回のスカラシップで注文した油絵具、特に「油一」と「ヴェルネ」シリーズは、最初はちょっと油っぽく見えるが、使ってみれば鮮やかな発色と細かい肌理、混色しても濁りにくく、とても描きやすいです。添加物の多い現代の一般的な油絵具と違って、「本来の油絵具」はこうだったと、使うたびに感心しました。

そしてこの機会に、下地材もいろいろ試しました。今までジェッソしか使ったことがなかったが、今年「アブソルバン」も愛用するようになりました。アブソルバンの白の発色とジェッソとはちょっと違って、もっとマットな自然な感じがします。それからそのまま油絵具で描くととても相性が良く、乾燥時間も早いです。こうしてより古典的な材料と接触し、油絵の技法をもう一度一から見つめ直すと、古くからの伝統から受ける知恵が、まだまだたくさんあるかもしれません。

Scenery Divided by the Trunk
油絵具、キャンバス
116.7×91.0㎝
2018年

それから、今年から紙や板の作品も製作しはじめました。今回の奨学生に選んでいただいたおかげで、支持体によっていろんなメディウムを試すことができました。絵画を専業とする私にとっては、とても大きな援助になりました。台湾に帰ったとしても、油絵具の伝統と様々なメディウムに関心を持ち続けて、新たな領域を開発したいです。

Seascape with Black Shape
油絵具、アクリル絵具、キャンバス
162.0×130.0㎝
2017年

廖震平

1982年　台湾新北市生まれ

2010年　台北芸術大学 美術創作研究科 卒業
2013年　創作拠点を横浜に移転

個展
2018年　練習曲　科元ギャラリー／台中［台湾］
2017年　Under 35/2017　BankART Studio NYK／横浜
　　只在此山中　東京アーツギャラリー／東京
2016年　棲息地　科元ギャラリー／台中［台湾］
2015年　白いリボン　科元ギャラリー／台中［台湾］
2014年　岸根公園　科元ギャラリー／台中［台湾］

グループ展
2018年　さかのぼる　INAMORI Gallery／鎌倉
　　島上的群島　高架下Site-A gallery／横浜
　　The Repose Between Each Journey　Gaiart／台北［台湾］
　　未来劇場　関渡美術館／台北［台湾］
　　漂白する私性 漂泊する詩性　横浜市民ギャラリー／横浜
2017年　美術3・展－喫茶と書籍と共に　ジャック&豆の木ギャラリー／鎌倉
2016年　Echoes Reveal　MA2 Gallery／東京
　　The Oppression of Tilted　CRANE GALLERY／高雄［台湾］
　　BankART AIR 2016特別展　BankART Studio NYK／横浜
2015年　未来の超短編　福利社FreeS Art Space／台北［台湾］
　　横浜北部美術公募展2015　横浜市民ギャラリーあざみ野／横浜
　　トーキョーワンダーウォール公募2015　東京都現代美術館／東京
　　New Wave: the road of memories　and N Gallery／ソウル［韓国］
2013年　テーブルの上の未来　関渡美術館／台北［台湾］
　　Innovation and Recreation－若手アーティストコレクション展　国立台湾美術館／台中［台湾］

受賞歴他
2018年　黄金町アーティスト・イン・レジデンスプログラム／横浜（ ’17）
2017年　BankART Artist in Residence／横浜（ ’16）
2015年　横浜北部美術公募展2015審査員賞／横浜
　　トーキョーワンダーウォール公募2015入選／東京
2014年　台湾アーティスト海外交流プロジェクト―北京　天美芸術基金会／台北［台湾］
2013年　Art Bank Taiwan入選　文化部、国立台湾美術館／台中［台湾］
2008年　台北美術賞入選　台北市立美術館／台北［台湾］

http://zenping.web.fc2.com/
https://www.instagram.com/zenping

The Scholar Perspective 20

アクリラート別冊2019

発行日　2019年７月30日発行
定　価　1,000円（本体価格）
発行所　ホルベイン画材株式会社
　　東京都豊島区東池袋2-18-4
発行人　川見良夫
編　集　関根民江

Cholbein